

立て、食み合ふにも似て居る。

「殺して了へ、疊んで了へ、畜生ッ、獸め」

あらゆる罵言の中に血が漲ぎる、石が降る、棒切が飛ぶ、宛然阿鼻叫喚の地獄が愈酣にならうとする一刹那。

「待てくれ〜」といふ聲が聞えて魚鹽を擔いだまゝ格闘の真只中へ飛込んだのは虎吉であつた。

「止めるなく〜」と宅平が言ふ。

「いや待てくれ、什麼しても行るといふなら俺の死骸を飛越えて行てくれ」

恁う言て虎吉はどさりと魚鹽を下に置き、其上に腰を下して浦島家の人夫共を睨んだ。

「やい、手前達は俺の面を知てるかよ」

敵も味方も黙つて了つた、而して負傷者の唸聲や險しき呼吸遣だけが彼方此方に聞えた。

「虎さんだ」と一人が言ふ。

「虎さん！」

「虎さん！」

口から口へと傳はる囁きの中に人夫共はじり〜と尻込をした。

「豪えもんだなあ豊さん」と三公は又々感嘆した。「どうだい、敵の奴等は皆な吞まれて了つたせ」

「ねえ小父さん、と虎吉は宅平の方に向直つた。「先方の爲る事は何も彼も癪に障る事だらけだ、だが此那大騒をしなくたつて静かに掛合ても事が済む事ぢやありませんか、先方が無法に出たからつて此方も亂暴しちや、喧嘩兩成敗で此方の道理も無理になつて了ひます、生命を捨てるなら捨てる様に此方も機會を見て懸らないと難儀する許か世間の物笑になるぢやありませんか、今日は此儘にしてね、明日でも明後日でも私が一人で掛合に行きます、若し其時に私の言ふ事を聞かぬけりや其時こそ皆様の生命をお貰ひ申します、今日の處だけは引取て下さい、なあ皆さん、お前達も貧乏人なら敵の奴等も大工や石工泥運の人足だ、華族が悪かろうが、人足共に罪が無え、可いか解つたか、貧乏人は皆な仲好くしなきやならねえんだ、華族だつても善い華族もあれば悪い華族もあらあな、一概に富豪を憎んぢや濟まねえ事だ、浦島にだつて人間らしいものがあるなら、路普請や溝浚ひ近所の迷惑にやらねえ様に取計らつてくれるだ、うう、折角なさけ宿が出来上つた

のに皆なが華族に亂暴したとあつちや警察は愚か世間では無頼漢の集會所の様に思ふまいものでも無え、私だつて生命は惜しくねえ、だが詰らねえ事をしてなさけ宿を廢めさせられる様な事があつたら私は残念で死んでも死にきれねえ、華族と貧乏人と喧嘩をすれば貧乏人が悪く言はれるに決まつてる、えいおい一同！お前達だつてなさけ宿の飯を食つて生きてるなら俺の一言位聞いてくれても可いちやねえか、聞かれねえといふなら、さあ俺の死骸を跨いで通れ
右を向き左を向き、鉢巻に汗が滲んで、充血した眼には決死の色が漲つて居る宅平初め一同は黙つて地上を見詰めた。先刻の殺伐に引替へて水を打た様な嚴肅の氣が場内に満ちくた。
と崖の上では浦島家の入夫共が遠吠を初めた。
「何んだ腰が抜けたのか」
「がたくく慄へてるぢやねえか」

「虎が来たつて狼が来たつて屁の木片だぞ」

「怖くて蒐れねえなら手を突いて謝罪れ」

どつと関の聲を擧げると棒杭小石がばらばらと降て来る。

「やれ〜」と三公等は犇めいた。

「黙つてろ」と虎吉は亂石の中に立て上を睨んだ。「生命の要らねえ奴は明日虎吉が行くまで待てろ」

其聲が聞ゆればこそ崖上の敵は再び関を擧げた。わつといふ諸聲が止むと同時に築きかけた富士山の中途から「あらッ」といふ聲が聞えて、久満子はする〜と踏滑つた。

と其れと殆んど同時に空を唸つて下駄が飛んで来た。

「畜生ッ」と宅平は言た。宅平の額に當つた下駄が鐵線の上に戛然と響をなして落ちた。

「畜生ッ下駄で人の顔を」

血に滲んだ額を向けて宅平は崖の上を睨んだ。

「もう勘辨ならねえぞ」

儂麻質の彼は痛を忘れて飛ぶが如くに假橋を駈上つた。虎吉はあつと許驚いたがもう及ばない。

「續け〜」と三公が叫ぶ。

なさけ宿の面々は幕地に上らうとするを虎吉は大手を擴げて阻止めた。

「爺を叩き殺せ」と人足共は崖の上で宅平を取巻かうとした。同時に「きやッ」と

いふ女の聲！

「人質取た、皆な續け」と宅平の聲は凜と響いた。

と見ると宅平は小腕に久満子を抱へ片手に短刀を引抜いて白髪を振亂したまゝ突立て居る。

「俺に下駄を打突けた女め、子爵の室へ案内しろ」

「子爵は私だ」と子爵は慄へながら人足の中から顔を出して、「用があるなら静かに聞かう」

「よしッ静にしてやる」

久満子を抱いた手が離れたかと思える間に、老いたる鐵腕は早くも子爵の首に絡んだ。

「さあ生命を貰つたぞ」

右手に持った短刀がきらりと閃めく、其の一刹那！

「お父さん」といふ聲が聞えた。其聲は夜となく晝となく夢に現に待ち倦ぐんだ聲である。

「お父さん！」

宅平は短刀を持つたまゝ、憤乎とした。

「御父さん、止して下さい」

三度目の聲の時宅平は憂然と短刀を落した。足元に突伏したのはお八重である。

「お八重！ お前は……」

「私は……私は……此方の嫁でございます」

「うむ」と宅平はたちくと後に退つた。「そ、そ、そりや本當か」

「はい」

「其れちやお前は……耻辱らしめ死損なひ奴汝は能くも俺に……」

憤怒の拳がお八重の頭上に鐵槌の如く落ちかゝらうとする一刹那、黙つて其の手に縫り付いたものがある。

「私を殺して下さい」と言ふのはお秀である。彼女は聲を放つて泣いた。

「あら其那に動かしちや恐いわよ」

嬌めかしい聲が奥庭に聞えると男の「はゝゝゝ」と笑ふ聲も聞える。

月は朧に霞んで謎の如な樹木の影が薄ぼんやりと芝生に落ると、寒くもなく暖かくもない風が凜る様に顔を吹く。

久満子は漸く止まつた鞆轡から下りて故意とらしく明の肩に掴まり、片手を首筋に絡んで踳踏げかゝつた。

「どつこい危ない」と明は踏止まつて「どうですもう一遍」

「いゝわよ、酷いわよ、知らないわよ」と久満子は急に手を釋いて芝山の腰掛に腰を下ろす。

「怒つたの？」

「知らない！」と振放つて横を向く。

「一寸怒つたお顔を拜見」と寄添ふ。

「知らない！」

「おや本當に怒つたんですね、所謂美人の嬌瞋か」

「知らない」

「其れちや僕も知らない」と肩を並べて半ば背中合はせの體。二人は沈黙した。而して思ひくゝに相手の方から言葉の掛るを待た。

「はゝゝゝ」と明は到頭笑ひ出した。

「體裁が悪いから笑つたの？」

「嬉しいから笑つたんです」

「兎も角も負方の方が負けよ」

「何が？」

「最初に聲を出した方が負けなのよ」

「ちや貴方は競争して居たのですか、僕と？ 其れや爾でせうとも、愛の深い方が負けになるもんですよ」

「口先ばかりの愛ね」

「僕が口先ばかりなら貴方は手先ばかりね」

「もう止ませう、詰らない話は、私其れどこでないのよ」

「人生の悲哀を感じましたかね」

「悲哀を感じもしやうちやないの？ 貴方の様な人を相手にして居ちや」

「何故です」

久満子は霎時打案じて「私結婚は止さうと思ふのよ」

「結婚を？」と明は少しく慌てたが直ぐに備を立て直した。慙ういふ不意打を食はして俺に氣を揉ませやうたつて其の手はもう古いと心に嘲けりながら故意と落

着いて「僕も爾思ひますよ」

「屹度ですね」

「屹度ですとも」

「貴方は他にいくらも女があると云ひたいんでせう」と久満子は微笑む。

「貴方も他にいくらも男があると云ひたいんでせう？」と明も微笑む。

「爾ですとも、私だつてもう少し自由に遊びたいわ」

「爾言ふと僕が氣を揉むと思つてるんでせう？」

「どう致しまして貴方にはいくらも女が御ありなさるさうですから」

「一體貴方は什麼する積なんですか」と明は到頭根氣負をして少し焦れ出した。

「何を？」

「結婚を！」

「だつて仕方がないわ」

「眞面目になつて下さい」

「ぢや御免なさいと仰しやい」

「御免なさい」

「降参と仰しやい」

「降参？」

「ほゝゝゝ」と笑つて久満子は明の耳をぐつと引き「痛いのか？」

「痛い」

「痛かつたら今度から私を焦らさうなんて野心を出しちや不可い事よ」

「承知 仕りました」

「でもねえ」と久満子は眞面目になつて。「此の家の相續人が決まらない中は駄目よ」

「決まつてるぢやありませんか、貴方に」

「いゝえ、爾ぢやないのよ、伯母さまが什麼しても正産さんにするると仰しやるんでせう。何にしる伯母さまが此邸に生れた人で伯父さまは養子だから権力が無いのよ」

「でも狂人を相續人にするといふのは……」

「いゝえ伯母さまもね元とく其氣はなかつたんだけれどもね、お八重が來たでせう、而して懷妊になつたでせう、其れで伯母さまは氣が變つたのよ」

「什麼？」

「生れる子は孫だから其子の爲に財産を遺さなけりや不可い、正産一人ならこれで血統を斷やしたいが、お八重は普通の人間だからお八重に財産を與るのは至當だと恚う言ふのよ」

「ぢやお八重を放逐すれば可いんでせう」

「其れや出來ないわ」

「什麼して？」

此時背後の櫻の蔭に足音が聞えた。

「出来ない事もないね」

二人は吃驚して其方を見返つた。股引に靴穿き、インパネスを着た上に柔帽子を前のめりに顔深く被つた男が、のそり／＼と出て来る。

「お前は何だい」と明は怖々ながら言た。

「俺か、俺は泥棒だ」

七

「泥棒？」と二人は吃驚して立上がつた。

「恐い事はありませんねえ、俺はお前さん達の仲間入に來たんだから」と怪しき男は落着き拂つて帽子を一寸被り直した時片眼だけがざらりと光つて見えた。

「仲間入？」と明は怖々ながら問ひ返す。

「爾ともお前さん達も泥棒の仲間ぢやねえか、えい？　なに秘したつて駄目ですよ、早え話は二人で此處の財産を奪取らうてんだから豪えや」

「何を言ふの？　と久満子が言ふ。

「まあさ、腕があつて他人の所有を奪らうてんだから文句は言へねえや、世の中てえ奴は何でも腕づくだ、泥棒と一口に言て了へばちよいと體裁が悪いが、腕づくで物を奪るのが悪けりや今の富豪は皆な悪徒だ、お前さん達の御先祖だつて鎗先の功名で奴で以て大名になつてさ、其の御蔭で今ちや華族様だ、悪い事ちや無え、本當に善い事たよ、什麼です俺は爾思ふね、巧く成功さへすりや泥棒も華族

になれるよ」

「お前は一體何處から来たんだ」と明は稍々勇氣を恢復して咎むる様に言ふ。

「何處から来たつて可いちやごわせんか、俺はお前さん達の手傳に來たんだから」

「手傳て何んだ」

「解らねい人だな、此邸が皆なお前さん達の所有になりさへすりや可いんでせう」

「……………」

「は、は、未だ若えな」と曲者は笑つて「どうでえ智恵を貸してあげませうか」

「そんなものは要らん」

「要らなきや止しねえな」と曲者は帽子でインパネスの袖を拂ひ、「俺は何方にした處が損のねえ事だ、今聞いたお前さん達の話を此邸の夫人に言ひ付けてやりさへすりや幾干かになるんだから」

「何？」と明は躊躇して「一體什麼すれば可いんだ」

「其りや此方から聞く事であ、まあ厭なら止すが可いさ、お八重さんの尻押をして見事お前さん達の裏を缺いて見せるから」

「お八重？」

「お八重を此邸から出さうと坐らさうと俺の胸一つだ」

「追出す事が出来るといふのか」

「俺は知らねえ」と曲者はのろ／＼と歩き出して「蛇と蛙は敵同士だ、お八重には情夫がある、腹の子は誰の子だか知らねえ者は知らねえ、蛇と蛙も敵同士だ、蛙と蛇も敵同士だ知てる者は皆な知てる」

「待てくれ／＼」と明は曲者を引止め「僕はお前の味方になるよ」

「なつて貰はなくとも可うござんすよ」

「そんなに怒らずともう一言聞かしてくれ」

「よしッ、たつた一言」

「お八重の情夫といふのは誰

「は、は、は」と曲者は笑つて「其れを言たら手品師が種を明かす様なものだ」

「お金を與げるわ」

「要りません」

「ちや什麼すりや可いの？」

「巧く行つたら財産の山分といふ處だが、大見切に見切て五萬兩だね」

「お八重さへ追出せれば五萬圓は與げるわ」と久満子が言ふ。

「乾度ですわね」

「證文を書いて可いわ」

「證文？　ハ、ハ、ハ、俺は泥つくだ、證文があつても明るい處へは出られやしねえ

口約束で澤山でさあ」

「で什麼するの？」

「此の次の月夜の晩だ……まあ見て御覽なさい」

八

憂き事多き其日〱も積り積りてお八重は臨月となつた。

庭の木立の若芽美しく伸びて春も開けたる緑の築山に藤の花房が思ひ出した様に揺ぐと木の間から唳るやうに晚櫻の花片がちら〱飛んで來る。さしもに廣い浦島家は久満子が留守と見えて大寺の様に森閑として居る。

「もう春もお終になつたわねえ」

お八重は重き腹を抱へて庭を眺めた。何處からともなく金糸雀の啼しきる聲が

聞える。父の短慮、子爵の危急を救はんがために吾を忘れて飛出したもの、其後の事は少しも知らない、人々に圍繞かれて居室に打臥した我妻に氣の付いたのはあの日の夕方であつた。其れから最早十日餘り、考へれば考へる程什麼して可いのか解らない。逃げやうとも思ひ死なうとも思つたが、自分一人を頼りにして若様を什麼して捨てられやう、又た其の上にお腹のお子を暗から暗へ葬るなんてどうして、誰が何と言ても出来やしない。左りとお父様のお腹立は什麼だらう。昔からの華族嫌なのに今度の事で殺すの生かすのといふ彼那騷を仕出来した位だから、言は、敵同士、敵の嫁に娘がなつてると思つたら、あの御氣象では私を踏んで、踏み殺してもお腹が癒えやしまい。私が殺されたつて構はないが、其那事で病氣でも起して被居やりはしまいか。

お八重は庭の一方を見詰めたまゝほろ／＼と涙を零した。
「行て見たい、會ひたい、御父様の足で踏まれて見たい」

彼女は涙に濡れた眼を拭かうともせず同じ考へを繰返した。御父様の許へも行かれず、浦島家にも居られず、左りとして若様を捨てられもせず。

不圖氣が付くと若様が見えない、今程まで庭を散々して居たのが何處へ被行たのだらうと四邊を見廻すと躑躅の早咲一簇紅き池の岸に躑がんで一心に何事かして居る姿が見える。

「若様！」とお八重は聲を掛けると、漸く頭を擧げて此方向き手を以てお出を出をする。

「お八重、僕は今好い事をしてるんだよ」

「何を遊ばして被居やるの？」とお八重は草履引掛けて静かに歩み寄り見れば棒杭やら板片、釘、縄、鎌などを置いて地の底を掘り杭を打ちなどしてゐる。

「僕はね、棒杭を打てるんだ。爾しないと赤坊が危なくて仕様がな、そら轉んで池に落ちると大變だからな」

「ほゝゝゝ」とお八重は思はず笑つた。「未だ生れないぢやありませんか」

「でも生れてからでは間に合はな、だらう」

「間に合ひますとも、歩行をなさるまでには二年もありませんから」

「直ぐ歩かないのか」

「いゝえ、直ぐお歩行にはなりません」

「爾か、ぢや何だね、初めは人形と同じなんだね、爾々爾だよ萬龜さんの生れた時にも爾だつたよ」若様は臙に過去の事を思ひ出したらしい。

「えい、お人形の様ですよ」

「お前男を生む積か、女か」

「何方ですか解りません」

「お前解らないのかい」

「はい」

「でもお前の腹に居るんだらう」

「お腹の中ですから解りにくいのでございます」

「あゝ爾々なる程爾だ」と正彦は何を感じたか奇妙に了承んで、道具を片付け初めた。

「若様、私も何か運びませう」

「不可いよ、お前は重たいものを持つと腹の子に障るさうぢやないか、何でも可いからね、男の子を生んでくれ、男だぞ」

「はい」と言たがお八重は直ぐ俯向いた。男は必ず精神病者と決まつてる此の浦島家に、若し男が生れたら什麼しやう。

寝ても起ても氣に掛るのは此の問題である。

お八重の沈んだ顔を見て正彦は心配さうに寄添うた。

「お八重何を考へてるの？」

「いゝえ何にも……」

「いや何か考へてるだらう、僕はねお前が憐れいであるか嬉しい事があるか一寸顔を見たと解るよ」

「でも若様、私は何にも考へは致しませんもの、そうれ御覽遊ばせ八重は笑つて居ますよ」と嬌然して見せる。

「うむ爾か、笑つてるね」と正彦も他限なく笑つて「あゝ解つたよ、お前の考へてるのは曾時の友達の病氣の事だらう」

「友達？」と言つてお八重は刷と顔を染めた、長次から手紙を受取た時に咄嗟の場合に言葉に詰つて言た嘘を若様が今だに忘れずに居る。此の嘘が何時まで露はれずに持續されるだらうか、縦令露現はれずに居るとしても何にも知らずに徹頭徹尾自分を信じて居る若様に對して餘りに罪が深い。

「友達の病氣が癒つたか」と若様はお八重の手を我が手に組み合せ膝の上に置きながら「金が要るだらうな」

「はい、いゝえ」

「僕お小遣を貰ふとお前に與げるよ」

「いゝえ私は要りません」

「併しね、質に入れるのは損だよ、あれは利子が付くから」

「えつ？」とお八重は吃驚して正彦の顔を見詰め、「どうして其那事を御存知ですの？」

「は、は、は、と正彦は笑つた。「質位は知てるよ。僕の友達に僕の本と外套を持って行た事があるから、其れからね明君は僕の種々なものを持って行たよ」

「何時でございますか」

「ずつと昔さ」と平氣に言て。「あの時は僕面白かつたな、皆なに酒を飲ましてやつたつけ、お母様に叱られたよ」

「まあ」

「お前あの時に僕と友達だつたら可いんだな、併しあの時では夫婦になれないから詰らないね」

「えい、仍且今の方が宜しうございますわね」

「僕はお前のお父様に會ひたいな」

お八重は笑みかけた口元を閉ぢて俯向いて了つた。

「お前のお父様だから屹度善人に違ない、僕は逢ひたいね、お父様の前でお前と

巫山戯たり何かすると怒るかい」

「いゝえ決して怒りは致しません」

「爾だらう、僕の御父様も母様も怒りやしないからな」

今日は餘程氣持が可いと見えて朝から種々な事を言つて笑つて居る。別に是ぞといふ取留のある話ではない、話の續きから段々と話が轉換し行く、假令は鳥の話が出るゝと鶴を思ひ出す、同時に動物園、其れから餌の鱈、鱈から河、河から船海水浴、別荘、話は方々へ飛で終りには結局

「お八重は一番可愛い」と言ふ事になる。其の相手をするには何人と雖も非常な忍耐力を要する。けれどもお八重は少しも倦まなかつた、而してどんな頓珍漢な話でも静かに一一句づつ聞き分けて漏らさない、正彦が次第に急ぎ込んで來るとお八重は巧みに氣の落着く様な話題に移る様に仕向ける。正彦が沈んで居ると氣の引立つ様な話題を持出す。どうかすると正彦の話が餘りに飛びくで判じ物

の様ように解わからない事ことがある。最初さいしよは困こまつたが頃このころ日はお八重やへだけでは什なん麼んな印象いんしやう的てきな言葉ことばでも判はんずる事ことが出来る。

廣ひろい室むろにたつた二人ふたり、毎日まいにち同じ事ことをして遊あそんで居まる。其それが堪たまらなく嬉うれしい、明日あすの日ひが待まちたれる許はかばか嬉しい。一年いちねん前に血ちの涙なみだを滴たらした此この邸やしきの土つちはお八重やへに取とつての樂らく土どとなつた。

十

戀こひ！ 他人たにん同どう士の靈たましひと靈たましひが結むすび付つく、こゝで戀こひといふ不可ふか思議しぎなものが出来できるが、扱あつかて人間にんげんは肉にく體たいを有あつてるので、肉にくのために靈たましひが結むすび付つく事ことが出来できぬ場合ばあひがある。

ある 親おや兄弟まご、親しん戚せき、血けつ統とう、階かい級きよ、是これ等らは一個こじん人の肉にくを醬ひしほの如ごとく壓おさへ付つけ、手て械がせ足あし械がせで靈たましひの自由じゆうを妨さまたげやうとする。幾いく多たの悲ひ劇げきは此こゝ處ちから胚はい胎たいする。

靈たましひを先まにする人ひとは先まづ愛あいし合あつて其それから結けつ婚こんし其そ處こゝで靈たましひと肉にくの一致いちじに到達たうたつする。だが、人生じんせいは其そればかりで律りつする事ことは出来できない、中なかにも日本にほんの習しゆ慣くわんは肉にくを先まにして愛あいを後のちにする。深しん窓そうに泣なく夫人ふじんの涙なみだは蓋おほし此こゝに湧わき出でるのである。

併しかし此こゝに例れい外ぐわいがある。其それはお八重やへの生涯しやうがいである、赤あか兒ごが猛まう獸じゆうの檻かぎに投ほうり込まれた如ごとく彼女かのじよは一塊くわいの肉にくを獲とんがために舌したなめづりをして居まる男をとこの手に賣わたされた時とき、彼女かのじよの靈たましひは既すでに死しんで居また、愛あいする男をとこの事業じぎゆを助たすげんため、一いっ片ぺん報ほう恩おんの志しを果はたさん爲ために、生涯しやうがいを此この牢らう舎やに送おくらうと決心けつしんした、良よ人ととする人ひとは常じやう識しきもなき狂きやう人じんである、此この狂きやう人じんに我わが身みを託たくさうとは曾かつて夢ゆめにだに思おもひはしない。

けれども彼女かのじよの肉にくに正ま彦ひこの手てが觸ふれた、而そして凡すべての意識いしき力を失うしなつた彼かれの血ちの中なかに只ただ一つ、たつた一つのお八重やへを愛あいするといふ意識いしきだけは確たしかであつた。哀あは

れな狂人！ 自分を恠くまで愛してくれる狂人！ 父祖の遺傳から惡劫に惱んで
家庭からも社會からも狂人よ／＼と冷罵されて居る良人の境遇を憫れむに付けて
彼女の俠氣は彼女の靈を揺ぶり起した、彼女の死せる心の底から我を愛する者に
對する感激の芽が萌した、芽は潔く美しく周圍の迫害が加はれば加はるだけ次第
に生長の力を増した。芽は段々に伸びて苔となり花と咲き出した。肉から眼覺め
た愛の靈はどれだけ彼女を幸福にしたらう。又た不幸にしたらう。幸か不幸か开
は他人の論議すべき處でない。

二人は悠暢した氣持で日を浴びながら互に顔を見合はせた。而して微笑んだ。
「あら大變に静な事ね」

餘所行の歸りと云ふ風に落着かぬ態度をして久満子は入つて來た。

「何故來たんです」と正彦は卒氣なく言ふ。

「御挨拶ね、私が來たのが悪かつたの？」

「悪いとも、僕はお八重と二人きりで居るのが好なんだから」

「結構ね、貴方とお八重とは本當に好い御夫婦だわ」

「爾だ／＼僕も爾思ふよ」と正彦は急に久満子に對して御世辭が好くなり「君は
美人ですね」

「あら、難有う、貴方も好男子よ、全くね……」と久満子はそろ／＼擲擲ひ初め
る。お八重はひや／＼して此の様を眺めて居た。

「さあ行きませう」と此時明が入つて來た。

「えい参りませう」と久満子はそわ／＼して自分の手を撫で髪を氣にして「お八
重さん私御無心があるのよ」

「えい何をでございますか」

「あのね、一寸だけで可いのよ、私これから白牡丹へ行てね、櫛と指環を誂らへ
て來やうと思つてるのよ、いつか貴方が大變に好いのお持ちでしたね、雛形に

見せてやりたいから一寸貸して頂戴な、晩まで、好いのよ」
「あの、櫛と指環？」と言たきりお八重の唇は色を失つた。

十一

久満子は立ちながら足をばた／＼さして、
「本當にあの櫛は好いわね、白金と黄金の秋草に露の玉は確にダイヤの様だつた
わね、私あの通りに誂らへたいのよ、ねえ一寸貸して頂戴な、其れから指環もね
あれは何といふ蔓草なの？ あの彫は氣に入らわ、是非ね、濟みませんけども
ね」

「全くあの指環は素敵なもんでしたね」と明が合槌を打ち而して顔を見合はせて
笑ひたさを泳へる様に横を向いた。

「あの櫛はあの……」とお八重は言溢つた。
「どうして？」

「あれは、あの……」
「其れやお大事な品でせうけれどもね、一寸で可いんだから」
「實は……お嬢様、今此には御座いません」
「無いの？ あら人が悪いわ、そんなに焦らさなくたつて可いちやないの？」
「全く此處にはありませんのですから」とお八重は耳根まで染めて首垂れた。
「あら本當に無いの？」

「はい」
「何處に置いてあるの？」

「何處と申しまして……」

「盗まれたの？」

「いゝえ、あのう」

「正彦さんが慫ういふ身體だからつて豈夫貴方は賣り飛ばしもなさりやしまいな」

「誰かに貸したんだらう」と明が言ふ。久満子はちろりと明を睨んだ。

「明さん貴方は妙な事を仰やるのね」

明は首を縮めて黙つた。

「どうしたの？ お八重さん」と久満子は突込む。

「什麼したつて可いぢやないか」と正彦は抱てる猫を投り出して言た。久満子は

笑つた。

「だから貴方は好い若様だといふんですよ、お八重に秘密事をされて知らずに居

るなんて結構ですよ」

「知らずに居るもんか、僕は知てるよ」

「何を知て被居やるの？」

「お八重の櫛の事も指環の事も知てるんだ」

「へえ、それぢや何處へやつたのです」

「質に入れたんだよ、なあお八重爾だらう」

久満子も明も呆れて顔を見合はした。お八重は凍付いた如く疊の上に身體を固くした。

「お八重はね、お友達が病氣だつて手紙が來たんだ、其人はね貧乏してるもんだからお金を與りたいと思つてもお八重に無いだらう、だから櫛を質に入れたんだ。久満子さんなんかは質といふものを知るまい、利子が殖えて仕様がなないものだよ、何でも持て行けば金になるんだ、だから皆ながお八重を苛めたら僕は此の邸

を質に入れてお八重と一緒に外國へ行くんだ」

「其のお友達はどうな人かを知て被居やるの？」と久満子は自暴氣味になつた。

「馬鹿だねハ、ハ、」と正彦は得意さうに笑つて「女のお友達は女さ」

「ふうん」と久満子も笑つて。「まあ可うござんすよ、お八重も精々品物を好きな男の許へ運ぶが可いさ、正彦は普通の人間でないから好い事をしたつて解らないからね」

「僕は普通の人間で無いかへ」と正彦は不平さうに言ふ。

「おや聞えたの？ 御免なさい、貴方は普通外れて御伶俐で被居やるわ、お八重

に好い事をされて……」

久満子と明は互に笑み交はして室を出た。お八重はわつと泣伏した。

「若様、御免遊ばせ」

「何を言ふんだよ、彼奴等は馬鹿なんだから氣に掛ける事はないよ」

「し、え若様、私は貴方に相済みません」

「何でも可いよ、お前と僕とは夫婦だ、他人が何と言つても構はない、面白い事をして遊ばう、さあハムレットを演らうか」

天晴自分は大人で、子供をあやす様にお八重を働はり初める。折角慈那に機嫌を取て下さるのに面白くもない懺悔話をしたら如何御機嫌が變るか知れやしな

い。お八重は又もや告白の機を失つた。

丁度其時女中のお覺が入つて來た。

「お八重様御手紙でございます」

手紙！ お八重の許へ来る手紙に碌なものはない、お覺の去た後でお八重は封書を其處に抛り出したまゝ疑と考へた。

長次が恐いからと言って此儘彼の言ひなりに任して居たら自分は什麼なるだらうお秀さんにも氣の毒だ、虎さんにも氣の毒だ、併し其れよりも氣の毒なのは自分ではあるまいか、人に盡し人の犠牲となるは好い事に相異ないが、其のために自分分が日毎く愛する良人を欺いて暮らすといふ事は餘りに罪が深い、是が狂人だから欺き了せる事も出来るが、普通の良人だつたら殺されもしやう、して見ると自分は良人の病に乗じて良人を愚弄してゐるのではあるまいか、可愛さうに何にも知らずに私を信じて被居やる、如何なる事があつても一點私を疑ひはなさらぬ其れに對して私の行爲は何といふ事だらう。

「どんなになつても構はない、長次が何と言はうと、虎さんやお秀さんが何とあらうと、私は妻としての道を守らねばならぬ」

慥う思つて唇を吃と噛みしめたが、聽て段々口元が弛むと共に緊張つた顔は一時に弛んで涙がほろ／＼と膝に落ちた。若し涙を若様に見られはしまいかと急に氣付いて其方を見やると若様は一生懸命に猫を捕まへて鬚の數を勘定して居る。

「だけれども御父様は虎さんの世話になつて居る、一飯の恩のために生命を捨てた人があつたとお父様が教へて下さつた支那の義人を思ふにつけても、虎さんの恩は決して忘れてはならない、私が今まで随分虎さんのために苦勞もし盡してあげましたが、彼れだけでは未だく足りない、一膳の御飯と生命！ 其れに比べると私の恩返しはほんの粟粒だ、不貞と言はれやうと悪人と言はれやうと御父様を養なつてくれる人の家庭を長次にめちやく／＼にさせる事は出来ない、虎さん

とお秀さんとは夫婦になつて什麼に嬉しからう、その嬉しい夫婦仲を裂かれたら

あの人達は生きては居られまい」

彼女の頭腦はもう疲れきつて此上何も考へる事は出来なかつた。

「五六七八九十叱つ動いちや不可い」と正彦は猫を叱る。

お八重は黙つて手紙を見詰めた、と飛上る様に驚いた。

「谷本宅平！」

墨黒々と書いた裏書！ 懐しき父の名！ お八重は慌て、封を切た。

「……今までの事は凡て夢と諦むべく候、拙者が浦島家に亂暴を加へしも短慮に過ぎたる行爲にて候、就ては久振にて親子の情を温めたく思ひ候へども、行掛上公然と會ふ事もならず候故今八日は舊曆の十六日にて月も好かるべく候へば九時頃を期して裏口よりお出有之たく候……父より……お八重殿」

「まあ」とお八重の顔は一時に活々と血の氣に甦へつた、彼の口は喜悦に溢れて

彼の眼は感謝と安心とに濡れた、而して彼の胸は只だ得も知れの浮きくとした波に揺られた。

「あゝ嬉しい〜」

思はず聲を出して手紙を懐から肌に入れ又取出して頬に受け唇に受け、

到頭聲を出して泣いた。

「どうした〜」と若様は猫を抱いたまゝ驚いて近寄る。

「若様〜」とお八重は正彦の膝にしがみ付いた。「私嬉しくて〜」

「なに？」と正彦は膽を潰し「嬉しい？ 爾か、嬉しくて泣いてるのか、お前

が嬉しければ僕も嬉しいよ」

暴動事件が起つてから宅平は我が家に閉ち籠つて一切外へは出なかつた。

「畜生め、華族の奴は俺の屋根を腐らし、俺の根太を動かさし、俺の娘まで攫ひ込んでしまやがつた」

彼は獨りで恚う言ひ續けた。虎吉もお秀も慰め様がない、二人は什麼かして宅平を外へ連れ出さうと努めた、けれども宅平は頑として聞かない。

「お八重もお八重だ、行く處に事を缺いて華族なんて獸の仲間入をするなんて、俺を世間へ顔出が出来なくして了つた。」

霜の薄の様に疎な白髪を撈つては悔恨と憤怒の涙を流して怒鳴り立てる。

「皆な私の故です」とお秀は言た。

「私が居なけりや此那事になるんぢやないのです」

「いや〜」と宅平は首を掉る。「お前さんには罪がない、華族の奴が悪いのだ、

彼奴等は昔の大名氣取で居るんだ、人間は皆な彼奴等の奴隷だと思つて居るんだ」宅平が鬱ぎ込むに件れてお秀と虎吉は次第に沈黙になつて來た。

「什麼かしなきや不可えな」と或夜虎吉はお秀に言た。

「えい、私いつそ死んで了ひたうございますわ」

「馬鹿な事を」と虎吉は叱つた。「お前が死んだら俺は什麼なる、なさけ宿は什麼なる、お八重ちゃん志を無にしちや濟まねえと思はないか、」

「死ぬにも死なれないわね」とお秀は泣伏した。

何れにしてもお八重は浦島家から救ひ出さねばならぬ、其れを成功げるには如何なる手段を取らうか、縦令此の身を殺してもお八重を救はねば男とは言はれない、虎吉は壁を見詰めたまゝ毛筋一本の搖ぎもなく凝として居た、彼の顔は見る／＼殺氣を帯びたり又た極めて溫和しい面持になつたりした。

「やつつけやう、どうしてもやつつけやう」と彼は思はず叫んだ。お秀は黙つて其の一擧一動を注意して居た。

「私も什麼にかしますわ」

「何を？」

「私だつて決して貴方の爲さる事を邪魔立はしませんわ」

「解つたか」

「えい、解りました」

二人は其れきりお八重の事に就て言はなかつた。と或日虎吉の店へ一通の手紙が来た。

「誰だらう」と無名の封書を取上げて虎吉はお秀に渡す、手紙を讀んだり書いたりするのはお秀の役である。

「虎さん、しばらくね、私は八重です、私は貴方に種々お話したい事があるの……」

どうしても一返御目に掛りたいわ、今日はね舊曆の十六日だからお月夜ですわね、お富士山の下の處で待て、頂戴ね、九時頃に私が行きますからね、屹度ですよ、人目が多いから此手紙も漸と書いたのよ」

「まあ」とお秀は意外に打たれて眼を据ゑた。

「丁度好いく」と虎吉は勇み立た。

「久し振で會たら什麼に嬉しいでせう、私本當に數へきれない程お禮を言ひたい事があるわ」

「そんな暢氣なんぢやねえ、罷り間違へば此方や生命を棄てなきやならねんだぞ」と虎吉は唸つた。

「今晚ね」

「うむ、今晚だ」

お八重はいそ／＼として時計を見た、夕飯過ぎた許の初夏の七時頃、暮れなんとする日の残照は空の雲を彩つて西の方は遠火事の様に見える。

「お父様に會へるんだ」と彼女は繰返した。

「お父様さへ怒して下されば私は世間から何と言はれても構やしない」

碌々孝行もしてあげないのに自分の氣儘から家を飛出した、父の怒は什麼であつたらう。華族嫌であるだけに私が此邸に来て居たのを見た時の心持は什麼であつたらう。其れを今急に怒して下さる、お年の故か、私が可愛い故か、但は他に理由があつてか。何れにしても今夜は會へる、しみ／＼と話が出来る、扱て何か

ら話して可いか解らない、只だ泣いて見たい。父の胸に抱かれて思ふ存分泣いて見たい。いや泣いたら父が心配するだらう。實際私には何も泣かない様な事件がありやしないのだもの。

同じ事を繰返しく冥想に耽つて居る中に日は何時しか暮れて室々の灯が庭の樹々を照らす様になつた。

「何か考へてるね」と正彦は猫を弄りながら言ふ。

「えい、私の父の事を」

「うむ爾か、父に會ひたいだらう」

「えい」

「僕も會ひたいな」

「貴方も？」

「お前の父は僕の父ぢやないか」

「でも若様、身分が異ひますもの」

「身分が異つてもお前の父は僕の父だ」

「本當に爾思召して下さつて？」

「本當だよお八重」

お八重は嬉しさが充満になつて正産の顔を見詰めた。

「お八重又た泣いてるね」

「はい、餘まり嬉しかつたもんですから、つい……」

「爾か嬉しいか、其れちや僕も嬉しい……ではお前の父に會ひに行かう」

「えつ？」

「これから直ぐ行かう」

「でも若様、これだけはお止遊ばせ、若様が其那事を遊ばすと左右の人達の口が煩さうございますから」

「其れや無理だ、僕がお前の父に會ひに行つたつて誰も苦情を言やしまい」

「でも其れでは餘まり……」

「いや行く、僕に行く、お前が行かなければ僕一人で行く」

言ひ出した事に逆ふと急激に病勢が募る、お八重は途方に暮れた。若様が普通でないといふ事は父も知て居る、知て居ながら私を恕して下さつたのだから父は今更苦情も言ふまい。けれども私が若様をお連れ申したら、若様が屹度他の人達に言ひ觸らすに違ない。邸の人達は其れを聞いたら什麼な悪口を並べ立てるか知れやしない。

「よし什麼ともなれ」とお八重は胸に決めた。私の良人だからお父さんの婿さんだ。會つて話をするのは至當の事だ」

「さあ行かう」と正産はせがむ。

はい参りませう、併し未だ時刻が早うございますから」

「早いのかへ、今は居ないのかへ」

「はい九時過でなければ留守でございますの」

「爾か早く九時になると可いな、お前の父に僕のハムレットを見せてやりたい」

十五

九時が来た。

お八重は正彦と共に窓と裏門を出た。例の銀杏林を通り抜けて、だらく坂を下り溝に渡した小橋を渡るとなさけ宿の裏へ出る。庭の富士山を築くために如何に此の一帶を荒したかは一目にも解る、家の壁は三尺許りが程は水に浸つた痕が

見えて、泥の海の乾いた處は恰らに龜の甲の如く崩裂れて居る、爾かと思ふと砂利や切石や棒杭などが混雜になつて小山の如く積まれた上に、石灰の儼が無難作に勝を食み出し其處らは戦場の如く散亂してある。ほんの道樂半分の庭の眺めを造るために幾十間とも知れぬ下級の人家が何れたけ迷惑を受けたかは是でも解つた。

「お父さんの怒つたのも無理がない」

お八重は恙う思ひながら霎時四邊を見廻した。何も彼も夢の様！去年の春父の許を出てから漸と一年と二三ヶ月、其間に空地になさけ宿が出来た。自分の家は隧道を歪みかけて居る。而して物干場の真上に富士山が聳え立つ。彼女は土地の變化に驚くと共に更らに我身の境遇を想ひ廻らした。此縁の髪を垂れた柳の下でお秀ちやんと洗濯をしながら身上話をした。彼處の井戸側で御父さんは毎も商ひから歸つて足を洗つた。其淋しさうな背後姿が今眼に見える様だ。あの時は什麼

して今日の様な身分にならうとは思へやう。虎さんは益々儲くだらう。お秀ちやんは幸福に暮らすだらう、而して自分は……。

彼女は正彦の方を見て嫣然した。「私だつて幸福だ」と彼女は言た。正彦は黙つて居る。十六夜の月は晝の如く明るく、宅平の歪んだ家の輪廓の影を劃然と地上に印して、家根越の月光は二人の胸から上を容赦なく照らした。

「もう何か言ても可いかへ」と正彦は獵夫が獲物を探す様な心持で小聲に訊く。

「えい宜しうございますとも、けれどもね、誰か来ましから黙つて被居やいませ」

「うむく」と正彦は子供が母に命令けられた様に首肯いたが直ぐ。「お前の父は

僕を怒りやしないかい」

「什麼致しまして父は屹度喜こんで居ますわ」

「でも華族が嫌なんだらう」

「華族様が嫌でも若様なら好ですわ」

「爾だ、さうく爾だね、お前の父は僕の父だからな」

「あら……若様其方に待て被居つて頂戴ね、柳の下にね、私が申上げるまでは隠れて被居てね、あら誰か来ましたわ」

なさけ宿の物置の横合から静かに歩み来る男の姿！半身月を浴びて顔が眩しう。お八重は一目見るや否や吃驚した。父かと思つたら虎公であつた。

「お八重ちやんかへ」と虎吉は月に透して聲を掛ける。

「えい」と答へたが、什麼して私だといふ事が解つたのだらうと虎吉の眼の鏡といに驚いた。

「おうお八重ちやん」

「あら虎さん」

二人は同時に足を急がして顔と顔とが寄合はうとする一刹那。

「待てくれ」と虎吉は怒鳴た。

「お八重ちゃん、お前と俺とは恁那處で立話をするよな身分ぢや無え」

「什麼して？」

「お前は華族様の奥方ぢやねえか」

お八重は黙つて袖口を噛むだ。

十六

「なあお八重ちゃん」と虎吉は續ける。「お前にはお禮を言ひたい事が山程ある、又た恨を言ひたい事も山程あるんだ、が今は何にも言はねえ、只た一つ、爾だ只た一つの御願だけは聞いて御くんねえ」

「お願て何なの？」

「どうかね、お前さんは浦島の郎を出て御父さん處へ還つて貰ひてんだ」

「そ、そ、其りや虎さん」

「出来ねえといふのか」

「出来ませんわ」とお八重は低聲で答へた。

「什麼して出来ねえんだ、お前其れぢや其時までも華族に繋がれて居やうてんだね、なあお八重ちゃん、俺とお前が其那女だとは知らなかつたお前だつてお父さんの子ぢやねえか行く家に事を缺いて華族の家へ行くなんて其れぢや御父さんに濟まねえぢやねえか、御父さんはね、お前が家を飛出した時、何處かへ身賣でもしたのか但は堅氣へ奉公してる位に思つて居たんだ、其れがお前、敵と視ふ華族の許へ行たと解つてから可愛さうに落膽して寝てばかり居るんだお前ほど親不孝な奴は世界中に無えや」

「親不孝？！とお八重は顛へ聲で言た。「爾です私は親不孝です、だけれどもね、私の親不孝は、私の親不孝は……」言ひかけて聲が噎と止まると静な歎息が起つた。「ねえ虎さん、私は什麼して親不孝をしなけりやならなかつたんでせう」
「什麼してつて……」と虎吉は鸚鵡返しに言たが直ぐ頭に兩手を掛けて深い吐息を漏らした。

「俺が悪い、爾だ俺が悪い、俺がお秀を嬖にしやうとしたのが悪い」

「あら爾いふ理由ぢやないわ、だけれども私あの時は……」

二人は沈黙した、と突然虎吉が言ひ出す。

「あれを見てくれ、あのなさけ宿を見てくれ、あれはお前の身體を賣た身代金で出来たんだ」

「あら私知らないわ」

「いや秘しても知てる、お前より他には千兩てえ金を送つてくれるものはありや

しねえ、俺はな什麼にお前の恩を難有く思つてるだらう。お前の出た日を命日に俺は神佛に後生を願つてるんだ、全くだ、あのなさけ宿はお前の血と涙で出来上つたんだ其れだけにお前が俺を思つてくれたのなら、何故華族の許へなんか行てくれたんだ、お前を酷い目に會はして其れで俺の望が遂げたからつて俺は手足を踏み延ばして寝られると思つてるか、出来た事は仕方が無え、是からが大事だ、なあお八重ちゃん、千兩の金を華族へ返さねえと不可えなら俺あ骨を粉に砕いても働いて返してやる、眞照の道に返つてくれ、お父さんの死水を取てやつてくれ、なあお八重ちゃん、俺の言ふ事は無理かも知れねえ、事の起因は俺から出たんだからな、だが無理でも聽てくんねえ、聽てくれなきや俺あ死んでもお前を放さねえんだ」

つか／＼と寄てお八重の手を握りながら「二度振て「俺あ無理だ、無理だが仕方かねえ」

「虎さん」とお八重は顔を上げた。

「貴方に無理な事は一つも無いわ、だけれども私ね、私は仕様が無いんですもの」

「何が仕様が無いんだ、華族に未練があるといふのか」

「華族なんか什麼でも可いわ」

「お前はお父さんを可愛さうだと思はねえのか」

「其れや爾思ひますわ、だけれどお父さんは貴方とお秀ちゃんにお預けしてある

から安心だけれども……」

「ちや何だつて歸られねんだ」

「若様が可愛さうですもの」

「なんだと」と虎吉は腹立たしく怒鳴た。「あんな氣狂が」

「氣狂だつて私を戀つて下さるだけは本當ですわ」

虎吉は呆れて思はず手を放した。

十七

此時富士山の麓に、ちらと三人の影が見えた、其れは長次と久満子と明である。

「まあ本當だわね」

「あれがお八重さんの情夫でさあ、畜生ツ巧くやつてやがる」と長次が言ふ。明は黙つて腕を拱んだ、月は益々冴えて眼下の二人の姿が手に取る如く見える。

虎吉は棒の如く立て何にも言はなかつた、お八重は最早一滴の涙もない、彼女は惜氣なく顔を月に向けて静に續けた。

「ねえ虎さん、親不孝と言はれても義理知らずと言はれても私はもう仕方がない

わ、貴方方と仲好くした八重は去年の春に死んで了つたんです、死んだ八重は又
生返つて若様といふ亭主を持つたのです、其れがねえ虎さん、什麼いふ事情だか
離れやうと思つても離れる事が出来ませんもの、耻かしい話だけれども去年私が
貴方を戀つて居た時、私の胸がどんなに辛かつたでせう、其れを思ふにつけて狂
人ながらも私を戀つて下さる若様の心の中を考へると、私だつて嬉しくない事は
ないぢやありませんか、女といふものはね、人を戀つてるか、人に戀はれてるか、
何方かしなければ生きて居られないものだといふ事が今度初めて解かりました、
狂人を戀ふなんて本氣の沙汰とは思へますまい、全く私は本氣の沙汰ではないか
も知らないわ、だけれども私は諦められません、ねえ虎さん、私がお邸の籠の鳥
になつてると思つたら貴方も御父さんも可愛さうな奴だ嘸辛からうと思ふでせう
けれども私は籠の鳥ではないわ、若様と一緒に居るのが何よりの樂みです、だか
ら何卒安心して頂戴ね」

「解らねど」と虎吉は頭を掉た。「狂人に惚れるなんて其那事があるもんか」
「どうして解からないの？」
「どうしても解らねえ、其りやお前が俺に安心させやうと思つて爾言ふんだ」
「いゝえ爾ぢやないわ」
「お八重ちゃん、解らねえ事を言はねえで此儘家へ歸つてくれ」
「私の家は若様のお傍ですわ」
「どうしても解らねえか」と虎吉はむづとお八重の手を取た。
「えい…私」
「よし、什麼しても連れて行つてやる」
力任せに引寄せやうとすると遮ぎつて、お八重は屹と言た。
「虎さん、私は貴方にどれだけ盡してあげたか御存知でせうね、いゝえ、ま
あ、貴方に言ひたい事があるんだけど其れは言へません、私は貴方とお秀

ちやんを幸福にしてあげたいばかりに什麼な苦勞をしてると思つて？ いゝえ
言ひますまい」

「其れは知てる、知てるからお前を牢屋から助け出すんだ」

「牢屋ではありません、私の楽しい家ですわ、其れだけ私が楽しみにしてる家から
私を引張出さうとするのは無理ぢやないの？」

お八重はわつと泣き出した。

「其那嘘を吐いたつて駄目だ」

片手を肩に掛けてぐつと引寄せる途端に「何をするんだ」と正彦が飛出した。「僕
の奥様を何處へ連れて行くんだ」

「何？」と虎吉は振返つて「狂人め來やがつたな」

「僕は狂人ぢやないよ、お前こそ狂人だらう」

「何だと？」

「人の奥様を連れて行くものは狂人だよ、なあお八重」

十八

黄金のために身を賣たのなら骨を砕いても身代金を作らう、權柄づくで壓へる
のなら腕づくで引取てやらう。恣う決心した虎吉は意外にもお八重が正彦に戀し
てる事を知たので、最早や什麼する事も出来なくなつた。

「お八重歸らう」と正彦が言ふ。

「えい歸りませう」

「それぢや什麼しても俺の言ふ事を聽かねえんだね」と虎吉が言ふ。

「虎さん、お父さんを頼みますよ、ねえ虎さん、だがお父さんは什麼して晩いんだらう」

「何が？」

「もう来さうなものだわね、九時から十時までの間と言ふんだから」

「誰が？」

「お父さんから手紙が来たのよ、お前を怒してやるつて」

「はてな」と虎吉は首を傾げた。「お前俺に逢ふ積でやつて来たのぢやねえのか」

「いゝえお父さんによ、して貴方は？」

「お前から手紙が来たから……」

「私から手紙？まあ」とお八重は驚いて「私手紙なぞ進げた覺はありませんわ」

「あるだらう」と正彦が言ふ。「お前の友達の處へ金をやつたらう、質に入れてさ

あゝ爾だお前の友達の亭主といふのは此男か、貧乏人で病氣だつてね、虎といふ

名前だね、病氣でも無いぢやないか」

「いゝえ若様」とお八重は遮ざる様に言つて「此人とは違ひます」

「爾か、爾だらう此人は病氣ぢやないね、貧乏は確かに貧乏らしいね」

「俺が考ふるに」と虎吉は正彦の言葉に耳も假さず腕を拱んだまゝ「これやお前と俺を此處へ引張出した者の計略に違えねえ」

「爾ね」とお八重は吻と深い息を吐く。

「誰だらう其れは」

「……………」

「お前心當りが無えか」

「いゝえ」といふお八重の返事は曖昧であつた。と此時崖の上にはらりと人の影が見えて「其處に居るのはお八重ぢやないの？」といふ聲は久満子であつた。

「はあい」とお八重は無意識に答へたが急に我が身の不安に襲はれた。

「さあ歸りませう若様」

「うむ、行かう」

お八重は急ぎ足で正彦と共に其處を去た。

「解らねえ、全く解らねえ」と虎吉は後を見送つたが廳で靜かに家へ歸つた。

お八重と正彦は裏門から歸つた。

「何だい、あれは、虎といふ男は妙な奴だね」

「あれはね私の……」

「友達かへ」

「いゝえ」

「兄さんだらう」

「えい、爾です、兄さんですわ」

「お前は幸福だな、兄さんがあるから可い」

此時二人は富士の方へ差掛つた。と久満子が明と並んで立て居た。

「何をして居たのお八重」と久満子が訊ねる。

「いゝえ何にも」とお八重の答は鈍つた。

「解つてるわよ、お前には虎吉といふ前科者の情夫があるんだらう、其人と逢て

居たんだらう」

「いゝえ其那ものは……」

「ないといふのかへ」

「虎といふのは兄さんだよ」と正彦が言ふ。

「黙つて被居やい」と久満子は怒鳴て「さあ私の室へ御出なさい」

お八重は屠所の羊の如く久満子の居室へ連れ込まれた。騒を聞いて子爵も久保田も来る。

「什麼したんだ」と子爵が言ふ。

「お八重は不義をして居ます」と久満子は言ふ。

「なに？不義？其れや本當か」

「嘘を言ふもんですか、今現に密會してる處を見届けたんですもの」

「なに見届けた？」

「えい名前まで知て居ます、相手は魚屋の虎吉といふ前科者です」

「前科者？」

「子供の時から盗賊を商賣にして居たんですつて」

「お八重其れや本當か」と子爵は屹となつて膝に手を置いた。「なる程お前は正彦ばかりでは満足が出来なからう、けれどもお前は正彦の妻ぢや、人の妻たるものは如何なる事情あるにせよ他の男と密通をするとは怪しからん事ぢや、のみならず前科者とあつては如何なる災難を當家へ持込むかも知れぬ、什麼だ、お八重返答があるか」

「私は密通なぞ致しません」とお八重は兩手を疊に突いて頭を低れた。

「未だ嘘を吐くの？」と久満子は言て「ねえ明さん貴方も見て被居つたわね」

「そう」と簡單に答へて明は氣の毒さうに横を向く。

「密通でなくてあれは何なの？お前は何の用があつてあの男に會つたの？」

「其れは父に會ひたいと思ひまして」

「ぢや何故父に會はないであの男に會つたの？」

「途中で會ひましたもんですから」

「其れぢや、なぜあの男と會つたきりで父の家へは行かなかつたの？」

「……………」

「父には用がないのでせう、あの男に用があるのでせう、あの男と何の話をして居たの？」

「……………」

「さあ言つて御覽、お前はね、あの男に指環もやつたんだらう？ 櫛も時計も着物もね、なぜ其那事をするの？ 夜中に人の居ない處で男と密會をして其れで潔白だと言へて？」

「人が居ない事はないさ、僕が側に居たよ」と正彦はお八重の首低れた肩に手を掛けて「お八重心配するな、僕が付いてるからね」

「貴方がお八重を保證すれば何より結構ですわ」と久満子は笑つて。「ねえお八重、私は何もお前を憎みやしないよ、可いかへ、私はねお前の利益を思つて言ふのだ

よ、私はね、當家の事ばかりを考へて居たもんだから、今ま荒い言葉を出したのは悪かつたけれども、其れは勘忍して頂戴ね、私だつて女だもの、お前の氣を知らない事はないわ、詰りね私は當家の利益にもなりお前の利益にもなる様に計ひたいんだからね、本當の事を言つて御覽なさい、可くつて？ 男があるなら仕方がないわ、正彦さんは恚ういふ身體だからね、其りや私だつて同情するわよ、だから決して悪い様にしはしない、可くつて？ 正直に言つて御覽なさい。」

「私は姦通なぞ致しません」とお八重は又もや言つた。

「どうしても秘すの？」と久満子は荒らかに言つて「ぢや仕方がないわ、伯父さんの御意見通にするわ」

「家へ退がるより他に仕方がない」と子爵は言つた。

「僕は退げません」と正彦は抵抗する様に父に向ひ。「お八重は僕の奥様だ。何人もく知た事ぢやない、お八重！ お八重！ 泣くんぢやない、さあ行かう、あつち

へ行かう、何處でも行かう、何人もお前を管める人の居ない處へ行かう」

お八重は黙つて居る。

「さあ行かう」

「……」

「お八重く」

「若様！」と苦しさに叫んでお八重は性ど正彦の手を握つたかと思ふと、がくりと頭を下げて畳に突伏した。

潮

一

我が身の潔白を證明しやうとすれば何故長次に金品を強請らるゝかを言はねばならぬ、其れを言ふたら今までの心盡しが無駄になるのみならず、此邸を追出されねばならなくなる。昔のお八重なら寧ろ追出される事を願つたであらう、けれども今のお八重は死でも正彦の側を離れるのが厭になつた。子爵の詰責久満子の難問にお八重は何も答へまじ何も言ふまじと決心した。而して深く、我身の境遇を思ひ廻らして中に頭が次第に煙に鎖されて眼がぐらく、眩んだかと思ふと其儘其處に知覺を失つた。

いつの間にか室へ運ばれて彼女が眼を覺ました時に、心配さうに自分の顔を覗いて居る正彦の眼を見た。

「澄みませんでしたわねえ」とお八重は微笑した。

「あゝ死なゝかつた、お八重お前が死にやしないかと思つて随分心配したよ」と正彦は眼に涙を浮べて言ふ。

「まあ、其那に御心配を遊ばして？ 私ね、若様を置いて決して死なれやしませんわ」

「爾だ、本當に爾だ、お前は死ぬなら僕より後に死んでくれ」

「何故でございますか？」

「お前に先に死なれると僕は詰らないから」

「詰らない？」と言ひ返して見てお八重は嬉しさに胸が充滿になつた。

「若様は其那に私を思つて下さいますの？」

「爾とも、お前も僕を思つてくれるね」

お八重は何にも言はずに正彦の眼を見詰めた、此時腹の周圍が少しづゝ疼みを覺えた。

「どうかしたのかへ」と正彦はお八重の擧めた顔に氣が付いたので訊ね寄る。

「いゝえ、あのお腹が：：若しやあの」

言ひかけたが次の言葉が出ぬ。彼女は刷と顔を染めた。

「押してやらうか」

「いゝえ押しても癒りませんの」

「醫者を呼ばうか」

「いゝえ、あの」と言ひさして「奥様に一寸……」

「お母さんかへ、お母さんよりも僕に介抱さしてくれ」

「若様では不可せんよ、此の病氣は」

「どうして？」

「あの赤兒さんが生れさうですから」

「あゝ、爾か、爾々僕はお母様に命令かつてるのを忘れた、お八重がお腹が痛くなつたら直ぐ知らしてくれと言てたつけ」

正彦は直ぐ室を飛出したが、聽て幾代夫人と萬龜子を伴れて來た。

「どんな工合かへ」と夫人は優しく言て枕邊に座り、「随分痛むの？」

「はい、どうも恐れ入りました」

「いゝえ、心配おしでないよ、大丈夫だからね、私が添いて居ますから。其れで

支度は？」

「はい、戸棚に入れてありますが、いゝえ私が」と起き上らうとして又た枕に額を付けて苦む。

「あゝ可いよ、静にしてお居」

夫人は戸棚から行李を取出した。

「夫人あんまり勿體なうございます」

とお八重は顔も上げずに泣く。

「夫人なんて言はない約束ぢやないの。私は母ですよ、ねえお八重」と夫人は

柔らかな笑みを漏らして正彦と萬龜子に向ひ「貴方方は、彼方のお室へ行て被居やい」

「だつて嬰兒ちゃんが生れるのを見たいわ」と萬龜子は鈴の様な聲で言ふ。

「僕も見たいな」と正彦が言ふ。

「貴方方が傍に居ると生れませんよ」と夫人が言ふ。

「生れなけりや困るな」

「ぢや生れたら抱かして頂戴ね」

「あゝ、御守して下さいね」

僕もお守するよ」
兩人は漸々に立去た。

二

人間が人間を生む、生れた人間が亦た人間を生む。同じ事が繰返されて人類は限りなく生存して行く、此の生存を掌る唯一の力は即ち愛である。生んだ親と生れた子の間に愛が廣大無邊に擴がり出す、而して家族となり國家となり、人類の幸福を増進すべく努めて行くのである。愛があればこそ眠い眼も眠らずに働く、親が餓じさを堪へても子に菓子を買て

やる、生れた時には出生の祝、七夜の祝、誕生の祝、お宮詣、凡て親といふものは如何にして我子の出生に對する喜悅を表はさうかと苦心する、子が泣けば悲しくなる。笑へば嬉しくなる。抑も岩田帯の時から將に生るべき胎内の子に對して何れだけの幸福を囑して居るか知れない。これが普通一般の情である。

けれども親として胎内の子を呪はねばならぬ境遇の者がある、妊娠と知れた時に先づ第一の驚き、出産が近づくに従つて貧乏人が大晦日を思ふ如くに苦しみ、其間幾度か流産を希ひ甚だしきは人工的に暗から暗へと葬らうとする者もある。鳩の家の環は其れであつた。彼女は我罪を逃れやうとして却て其の爲に終身の刑罰を受けた。環の如き自ら罪を犯して罪の子を呪ふものは別としても、罪なき身でありながら我が子の出生を喜ぶ事の出来ぬ者がある。文太郎を生むだお濱は其れである、篤子を生むだ藝者の小新も其れであつた、お徳を生むだお秀も其れであつた、而して今ま産褥に苦しみつゝあるお八重も其れである。

妊娠！ 簡単な二文字が何れだけ人を喜ばせるであらう、而して又た何れだけ人を苦しませるであらう、此の不可思議な生殖の作用は何れだけ幾千年間の人類の幸不幸を支配したであらう。

「男が生れたら屹度精神病者だ」

此の忌はしき血統を思ふ度にお八重は胸に釘を打たれる様な思ひをした。「生れなければ好い、あゝ生れなければ好い」

生れなければ好いと呪はれた胎内の兒も矢張地上に光を見たいのである、自然に促される潮の如く、胎内の生長が充實して此世の空氣を直接に吸はうとする力が躍り出す。此力は何人と雖も抵抗する事の出来ない力である。弱い柔かいぐにや／＼とした一塊の小動物！ 其れでありながら其の「生長」に對しては親と雖も妨害する事が出来ぬ。其れだけ神聖で其れだけ威嚴がある。

お八重の産は重かつた。潮は幾度か差し寄せる、而して幾度か衰へて了ふ。五

體の骨の肉と筋とを齒車に轆き刻む様な痛みは止んだかと思ふと又募つて来る。人間が自分の身體から一人の人間を割り出す、此の苦痛が大なるだけ其處に尊き母の務を見るのではあるまいか。

幾代夫人は確とお八重を抱て勵ました、苦痛が迫り込む度に彼女はお八重の胸を背後から柔かに抱へ、片手に深く其の腰を擦つてやる。

「どうかして樂にさしてやりたい」

滿身の同情は夫人の手先に集まつた、背中から腰を分ける様に擦りつつ押しつ唸きつ壓へつする、額に汗が玉と迸しり力を籠める腕が痺れて棒の如くなりさう、其れでも幾代は屈しなかつた。

「確乎しておくれ、私は母ですよ」

此の唸きの聲を聞いて正産は幾度も襖の外から聲を掛ける。

「未だ生れないかへ」

「彼方へ行って」と幾代が叱る。其度毎に正産は眼に涙を溢めて母の室へ去る。室には萬龜子が人形を揃へて待て居る。

「赤兒さんが生れたら此の玩具を與げませう、此のお人形を見せてあげませう」
彼女は此の人形よりも美しい晝の様な嬰兒が生れるのだと信じて居る。

三

如何なる苦痛と雖も分娩の時の苦痛に比ぶべくもない。お八重の産は極めて重かつた。産婆も醫師も胎兒よりかお八重の生命を氣遣つた。

一塊の動物が産婆の手に落ちて鹽の湯氣の中に動いた時、お八重は人事不省に

陥つた。醫師は頻に産婦の脈を取り、體溫に氣を配り呼吸を計つた。幾代は疑と産婆の方を見やつた。産兒は未だ泣かぬ。

「どうしたんでせう」と幾代は産婆の傍へ寄つて小聲に訊ねた。

「大丈夫でございます」

「男なの？ 女？」

此の間は幾代に取つてどれだけ辛かつたか知らぬ。

「若様でございます」

「えつ？」と幾代は眼を睨つたが聽て唇を噛みしめて轟く胸を静めやうと努めた。此時昏睡の中にあつたお八重は微に口を動かした。

「お母様！」

「あい」と幾代は枕元に寄る。

「男でございますか……」

「八重さん」と幾代はお八重の両手を胸に組まして其上を凝と抱きしめた、其れは驚きの餘り逆上せん事を恐れたのである。

「女でございませるか」

「いゝえ、あの……確乎しておくれよ」

「解りました」とお八重は靜に言て微に眼を開いたが直ぐ閉ぢて深い呼吸をした長い睫毛にじみじみと涙が溢れる。

「心配おしではありませんよ」

憊う言ひながら幾代はお八重の頬に我が頬を接けた。

泣かなかつた産兒は此時漸やく聲を擧げた。たつた一聲二聲、其れは極めて力なき聲であつた。けれども初めて人生の空氣に觸れた自然の聲である。世界の人類の仲間入をした初見得の名乗である。身體の處々が紫色に腫て顔がむくんで擦過た様な薄い傷があつて、如何に母の胎内を出る時に苦しんだか、解る。生ま

うとする母の苦痛！ 生れて太陽の光を稟けやうとする子の苦痛！ 母は我が子に地上の幸福を與へやうといふ一心のために苦しむ、子は如何にもして自分の生長を續けやうといふ一心のために苦む、而して此の尊き戰鬥の疲勞から二人は共に眠つた。

眼が覺めると縮緬の小襖に包まつて綿の帽子を被つた嬰兒が極めて微弱な呼吸をして自分の傍に眠つて居る。お八重は漸と手を延べて小襖の襟を捲り、凝と我子を見詰めた。

「これが私の子だ」

憊う自分で確かめて見ると何だか急に自分といふ者が變つた様な氣がする。あの苦しい戰鬥で能くも自分が死ななかつた、能くも此子が助かつた。

「これが私の子だ」と彼女は再び繰返した。

「眼が覺めたの？」と幾代は隣室から聲を掛けて、「さあ正彦さん、嬰兒さんを御

「驚なさい」

幾代は正彦を伴れて室へ入つた。

「これが僕の子かへ」と正彦は氣味悪さうに言て、つくづくと嬰兒を覗く。

「えい、貴下の子ですとも」と幾代が言ふ。

「どうも其那氣がしない」

「どうして？」

「だつて少しも可愛くないんだもの、此那猿の様なものは厭だなあ」

「でもねえ若様」とお八重は強て笑顔をして。

「貴方は私よりも此お子を可愛がつて下さいませえ」

「其れや困るな、僕は此子よりもお前の方が餘程可愛よ」

四

生れた子は頭が馬鹿に大きく頸が細く、啼く時には鐵葉を引掻く様な皺腹れた聲を苦しさうに出して、乳を吸ふ力は極めて薄かつた。

「仍且爾だ」と幾代は肚の中で思つた。是ぞといふ特徴があるのでないが幾人かの子を生んで其れが皆な精神病者になつた自分の經驗から考へると、此の子も父の遺傳を受けたといふ事は一目にも解る。いや其れよりもつと著しき特徴は小兒の頭が二重になつて指で推せば埋まる程ぶよぶよしてゐる事と眼に光澤のない事である。此の鑑定は子爵も同じであつた。

「どうせ碌なものが生れやしない、豆屋の娘なんだから」と子爵が言ふ。

「いゝえお八重の故ではありません、私共の血統が悪いのです」と幾代が言ふ。

「だから小兒なんか生まなけりや可いんだ」と子爵が怒り返す。

「貴方がお八重を邸へ引取たのが悪いんです」と幾代も負けて居らぬ。

「道に外れた事をして人様の娘を玩具にして、子が生れたからつて其れを兎や角言ふのは餘り酷いちやありませんか」

此の争論は毎日の様に起つた、時にはお八重の耳に入る事もある。お八重は針の庭に坐る様な気がした。一月も立つとお八重は漸く庭の散歩が出来る様になつた。赤兒の名は正と號けた。

正は漸々と肥立た、けれども顔は老人の如く皺が寄て頭はいつまでもぶよぶよして居る。泣聲は相變らず皺噎れてるが、其の地の底から恨を訴へる様な細い聲で絶えず泣き續ける。晝の中は眠るが夜になると而も意地悪く十二時過頭から曉方まで泣きしきる。聲は夜陰を透して室々へ浸み渡つた。

「此の子は泣くために生れて来たんだ」と正彦が言た。全く正は泣いて人々を困らす爲に生れて来た様なものであつた。お八重は氣が氣でなかつた。自分の安眠

が出来ないのは止を得ぬとしても邸中の人々が什麼に厭に思つて居たらう、慙う思ふと居ても起つて居られない、抱て見たり背負して見たり、夜更に庭を歩いて見たり、爾慙してる中に夜が明ける、一睡もせず産後に疲れた身體ではあり、ぐらくする程重い頭を休へて晝寝も出来ず、彼女は初めて母といふものゝ苦しみを知た。

「いやだなあ此子は」と正彦も言た。

「此子が生れてからお前は些とも僕と遊んでくれない」

「若様、貴方と私と遊ばなくとも、此子と三人で遊ぶ方が宜しいぢやございませんか」

「でも僕はお前一人の方が可い」

「無理もない」とお八重は思つた。朝から夜、夜から朝まで正の爲に忙殺されて一寸も靜に正彦と語り合ふ事すら出来ない、正彦が段々苛立たしくなつて来る、

而して心の中で絶えず我子の正と暗闘した。

「此の子がなければお八重は僕の側を離れないのに」

あはれ生れたばかりの嬰兒は生の父にまで邪魔にされる様になつた。元より其れはお八重を愛すればこそ我子までも憎む爾思ふにつけてもお八重は狂人の正彦と病弱の正と何れを取るべきかに迷ひ出した。

「什麼ともして若様が正を可愛がつて下さる様にしなければならぬ」

彼女は次第に瘠せ衰へた。

五

正を可愛がれば可愛がる程正彦の機嫌が悪い。お八重は是には途方に暮れた。

彼女は心の中で寧ろ此の子が死んでくれれば可いと祈る事もあつた、けれども爾思ふと同時に益々正が可愛くなる。

「どうせ過去の世の劫が盡きずに父も子も狂氣になるなら私も一緒に狂氣になりたい」

悉うも思つた、種々な悲しい事が矢の如く自分の胸に集まる。と又た其下から自分がなかつたら誰が良人を介抱しやう誰が此子の世話を見るだらうといふ責任を感ずる。

既に狂氣となつた良人！ 是から狂氣となるべき子！ お八重には前途の幸福もなければ光もない、あるものは此の苦しい責任だけである。

或日お八重はつくづく正彦に言た。

「若様、貴方は什麼して、此のお子が可愛と思召しませんの？」

「可愛よ」と正彦が言ふ。「だけれどもね、お前が餘り可愛がると僕が可愛くなくなるよ」

「でもねえ若様、私は此のお子のお母さんでございませぬもの、可愛がらない譯には参りませぬわ」

「この子の母さんぢやないよ、僕の奥様だよ」

「貴方の奥様で此の子の母さんでございませぬ」

「いゝや」と正彦は首を掉た。「僕はお前の良人だ、けれども此の子の父ではないよ」

「何故でございませぬの？」

「だって僕の知らない中に生れたんだからな」

「でも此のお子は貴方のお子でございませぬわ」

「證據があるかへ」

「證據が？」とお八重は行塞つた。元より此子が正彦の子であるには違ひないが、如何を證據に此子が正彦の子であると言ひ得るであらう、妻と呼ばれ良人と呼び夫婦であるといふ事は誰が眼に見ても解るが、生れた子が果して誰の子であるかと疑はるれば、其れに對して何と答へるのが至當であらう、相手が常識のない狂人である、物の判斷力に乏しい、而して生れた子は何にも言へない動物である。若し嬰兒の口から私は何の誰の子であると明かに言ひ得たら凡ての疑ひが無くなるけれども、何人も其の證據を擧げ得ざる以上は父と子との關係が極めて曖昧なるものである。人間が愛といふものを離れ信といふものを離れて此の問題を考へたら、如何なる人と雖も姦夫の子でないと言明する事は出來ないであらう。

「證據があるかへ」と正彦は再び言た。

「えい、ありますとも」とお八重は漸く考へ付いて。「貴方が此のお子を可愛と思召せば貴方のお子だといふ證據ですわ」

「僕は可愛よ、だけれどもお前を取られたら、憎らしくなるんだ」

「では私が居なくなりましたら、そして貴方と正様とお二人きりになりましたら？」

正彦は霎時首を傾げて「お前が居なくなれば僕は此子を可愛がるよ」

「何故でございますの？」

「お前の子だから僕は可愛さ、僕が一等可愛と思つてるのはお前だから、其のお前が可愛がる者は僕も可愛がるのは當り前ぢやないか」

「其れでございます とお八重は熱心に正彦の顔を見詰めた。

「若様が私を可愛がつて下さいますなら此お子を可愛がつてあげて下さいまし、でないと私はお郎を出るより外に仕方がありません」

「お前に出て行かれると困るなあ」

お八重は有める様に正彦の傍に寄て、嬰兒を膝に抱かせ、「若様！ 御覽遊ばせ

正様は貴方のお顔を見詰めて被居やいますよ」

「何故見詰めてるんだらう」

「お父様だからでございます」

「あゝ爾か」

狂者と狂者になるべき者とが互に眼と眼を見合て霎時動かなかつた。

「ねえ若様！ 貴方と私と二人で此のお子を可愛いがつてこそ本當の夫婦ぢやありませんの？」

正彦は黙つて嬰兒の頬に接吻した。

何を感じてか正彦は掌を反すが如く正を可愛がる様になつた。

「お前は可愛い〜」正彦は口癖の様に言續けて片時も正の傍を離れぬ。

「若様、其那にお可愛いのでございますか」と或日お八重が訊ねた。

「爾とも可愛とも」と正彦は答へて、

「お前が可愛から正も可愛んだね」

「では若様、正様と私と何方が可愛と思召して？」とお八重はつい戯むれ氣味になつた。

「其れやお前解つてるぢやないか、お前の方が可愛さ、けれども此子を可愛がらなければお前が怒るだらう」

お八重はしみぐと氣の毒になつた。正を愛するのは自分に對する愛の爲であ

る、什麼かすると若様は泣きしきる正を抱いて情ない様な顔をしてお八重の方を見てる事がある、恚ういふ時にお八重は堪らなく氣の毒になつて良人の頬に充分接吻でもしてあげたくなる。彼女は良人に對する愛が益深くなると共に我子に對する愛も益燃え上がつて來た。

添乳をしながら快さうに吸付く正の顔をつくく〜と見て居ると、言ふに言はれぬ愛情が乳の響と共に五體に響いて來る。

「此のお子さんは什麼なるんだらう」

思ふまじとすれども迫り來るは我子の將來である。良人の如く狂人になるであらうか、什麼かして幼さい中から癒す方法がないものだらうか。若し癒らないとすれば什麼したら可いだらう。彼女は努めて氣を静め疑と考へれば考へる程前途に光もなく望もない。其れだけに彼女の愛は正に集中した。

「世界中に此お子を可愛がる者は私より他には一人もない、若し私が無かつたら

此お子は什麼なるだらう」

「慙う思つて彼女は身を顛はした。」

「私が無かつたらしく」と幾度も繰返す。

「若様も私も皆な死んでしまつたら……」

恐怖が犇々と迫つて来る。而して最後に「此のお子さんは什麼なるだらう」と

いふ元の問題に立戻る。

「正様は此のお邸の世嗣だ」と彼女は獨り口の中で言つた。「爾だ此お邸を襲りなさるものは正さんだ、私が若様の奥様である以上は正様はお世嗣でなければならな

い」

今まで曾て恣那に大膽な事を思つた事はない、彼女は母としての本能から什麼

しても我子の爲に我子が有する權利を主張しなければならなくなつた。

或日お八重は幾代夫人に慙う言つた。

「ねえお母様、正様は御當家の御世嗣になるのでございませうね」

幾代は吃驚した眼をしてお八重を見やつたが聽て深い息を吐いた。

「私は正彦で當家を斷絶さしたいと思ひますけれども、正が生れた以上は仕方がありますまいね」

「でも正様が御父様の様な御病氣になりましたら？」

「正だけで何も彼もお終です」

「あの久満子様が當邸を御相續遊ばすとか承はつて居ましたが……」

「其那事はく」と夫人は争ふ如くに言つた。

「他人に相續させる位なら此邸の財産を皆な貧乏人に與つて了ひます。馬鹿でも狂人でも邸に生れたものは邸の主人ですからね」

お八重は吻と息を吐いた。

我が子が病弱であるだけに將來の事が案じられる。若し若様の様な身體になつたら誰が蔭になり日向になりつして此のお子を保護してくれるだらう。憊ういふ場合に只だ頼みとするは當家の財産だけである。お八重は幼さいから貧乏で餓しくて育つたに金といふものゝ力を知て居る。彼女は正を抱きながら華族に生れた我が子の前途に只「金」が待て居る様な思に種々な空想を廻らした。何と言つても憊る時に我が憂も悲みも打明けて語る事の出来るのは幾代夫人だけである。夫人は日に幾度となく正を抱きに来る。而して兒の育て方に就て細かにお八重に教へる。

「私が若しも此邸に居なくなる様な事があると貴方一人で困るから能く覺えてお置きなさいよ」

お湯の使ひ様、襦袢の代へ様、授乳の時間や口中の洗ひ方、泣き様に依て兒の氣分が解る事や薄着厚着の時刻や其他重に成るべく腦を刺戟せぬ様に強い色彩や音響や震動を與へぬ様の事など教へられる毎にお八重は夫人が如何に正彦の育て方に苦心せられたかに驚歎した。

「あんなに大切にお育てになつても癒らないものは癒らないのだ」
憊う思ふと正の將來が覺束ない、覺束ないだけに可愛さが募る。

夫人の顔色は段々に蒼白めて來た、頬の瘡せも目立て來る、其れでも彼女は毎朝綺麗に髪を結びあげて塵ほども取亂した姿を見せない。爾いふ風に母が美しく見えるのを萬龜子は大好であつた。と、一日お八重は朝から夫人の來るのを待つ居た、正午頃になつても姿が見えない、夕方になつても見えない、お八重は堪り

かねて夫人の室を訪ねた。夫人は机に向て静かに観音經を讀で居る。一本の線香が眞直な煙を立て、二尺許の處で左右左に搖曳く。面竄れした洗髮姿、瘡せた額、明晰した眉の下に半ば開いた瞼の中に一向專念の瞼が疑と固定して居る。

お八重は此の物靜な光景に打たれて思はず膝を突いたまゝ動けなくなつた。

「お八重さん」と幾代は聽て經卷を疊んで押戴き靜にお八重の方に膝を向け、「私を力にしては不可せんよ、私は貴方に何のお助も出来ませんから」

「何故でございますか」

「其れは言へません世の中にはね、力になる人は自分より他にはないのでですから決して人を當になさるなよ」

お八重は何にも言へなくなつて室を出た。頃日夫人と子爵との間に激しい議論のあつたといふ事も略ぼ知つて居る、親戚會議が開かれたといふ事も知て居る。いかさま雷ならぬ問題がお邸に起つたに違ひない。お八重は暗い、心持で室へ

歸つた。と二時間許の後萬龜子が美しい衣服を着て零るゝ様な笑を浮べてやつて來た。

「正さんを抱こさして頂戴ね」

「えい、どうぞお抱なすつて下さいまし」とお八重は正を萬龜子に渡し、「御姫様は何處ぞへ御出ましでございますの？」

「い、え、私知らないわ」と萬龜子は餘念なく正に頬摺し。「御母様がね、正さんを抱こして遊んでお出と仰やつたのよ、お母さん處へ伴れて行て可い？」

「えい、宜しうございますとも」

萬龜子は喜び勇んで室を出たが半時間の後正を抱きながら、こゝして歸つて來た。

「ありがたうよ、今までお母様が抱て被居つたのよ」

「まあ難有う存じます」

「お寝みなさい」と萬龜子は去た。

まあ御祖母様に抱こして戴いて宜しうございましたね」

お八重は憊う言て正を寢さし、襦袢を代へやうと着物の胸を開くと、思はず手に觸つたものがあつた、其れは子安地藏の護符札である。

「まあ什麼したんだらう」とお八重は其れを推戴いて霎時考へた。

其夜幾代と萬龜子の姿が浦島家に見えなくなつた。

八

邸内は俄かに騒ぎ立た。心當の諸方に人を走らしたが皆目行方が解らぬ。

室内は柱と言はず承塵と言はず、障子の棧まで塵一本も留めぬ許に清く拭き込まれて、畳には一點の汚れもない。床の間には日頃念する大幅の楊柳觀音の御像を掛けて青磁の香爐に今ま盡きたばかりと覺しき香の灰が残つて居る。筆筒其他は悉く鎖して鏡臺に掛けた眞白な布が淋しく見える。特に覺悟を決めたと思はるゝは、家族召使共への紀念分に一々名前を書いた紙片を付け。萬龜子の玩具箱の机の抽出の中まで何一つ亂れた態のないのは日頃の嗜みが思ひやられる。平生着の儘で御出遊ばしたのだと女中共は悉く袖を絞つた。

南窓の經机に、毎もある珠數がなくて、一封の書置に水晶の文鎖を載せてある。

「不埒者めが」と子爵は苛立たしく怒鳴た。

「書置を讀で御覽なさいまし」と久満子が言ふ。

「いや讀む必要がない、讀みたいならお前が讀め」

久満子は静に封を切た。

「心も慌だしう候へば前後の辨へも定かならず筆に任せて書きのこしりし妻として御許もなく勝手に家出する事女の道には背き候へども左りとて隔かましき心もて御傍に侍りまゐらす事猶更ら罪深く存じ候まゝ萬龜子諸共此邸を立去り申候。

人の道は數あるに似たれども誠の一つの道は仁とかや承はり申候、外國にては愛と申し佛の教は慈悲と申候由にて候。仁と言ひ愛と言ひ慈悲と言ひ言葉は様々に變り候へども、落つれば同じ谷川の流の源は誠にあり候はん。如何なる因果か存じ候はねど、先祖代々惡病に祟られ子々孫々に至るまで世に呪はれつ我が身を呪ひつする事、假初ならぬ惡劫にて候、开を惡劫と諦めで一日くと世を欺き人を欺き扱ては害ありて益なき血統を其れから其れへと傳へ行く事、世に恐ろしき罪にて候はずや。元より先祖が亂酒亂淫のため

人並ならぬ子を儲けしは其の起因にて候へども、降つて十代餘の今日に於て今更ら开を恨むも益なき事にて候。

屢御諫め申上げし如く此儘續き候はんには數多の人を害ねて惡病を天下に播くの罪は免れまじく、人は年頃になりては結婚せねばならず、結婚すれば其れだけ病氣を蔓らす事となるべく候。斯かる呪はれたる血統は魔を封ずる如くに封すべきものには候はずや、我が子の可愛さは吾も人も同じにて候へども吾子可愛しとて他人の子を害ねるは人の道にてはあるまじく候。

華族といへば良多くも御上御一人に咫尺しまゐらす事もある身分、且は萬民の模範になるべき身分にて候はずや、汚れたる血統もて人の道を外れたる行為もて、をめぐ其位にある事空恐ろしく、思召し候はずや。

特に此度お八重の産みし正をば御親戚御一同の御協議にて怪しき者へ預けらるゝ様御決め遊ばせし事、餘りの事に只だ情けなき涙に暮れ申候。

お八重を迎へ候時私わたくしの申まをさぬ事ことには無な之な候まう、夫婦ふうふあれば子このあるは當然たうぜんの事ことに候まうはずや、正彦まさひこの愛あいに惹ひかされお八重やへを迎むかへなされしは、お八重やへを卑いやしき玩具おもちゃと思おぼ召めしての事ことにて候まうはん、されどもお八重やへも人ひとの娘むすめにて候まう果はしてお八重やへは正ただしうを産うみ申まを候まう、正ただしうの生立なまたちより見みれば正ただしうしく浦島家うらしまけの惡劫あくげつを稟うけ居まをり候まう。人ひとの娘むすめを狂人きやうじんに妻めはし、生うれたる子こを奪うひ取りて暗やみの中なかへ抛なげやる事ことは人ひとの道みちにて候まうべきか。家名かめいには代かへられず斯かる子こが又またしても生うれたりとありて

は愈々いよく當家たうけの耻辱ちじよくとなれば黄金かねを添そへて人ひとに遣つかはすなりと御前ごぜん様初まめ皆々みな様は仰おほされ候まうが、血統ちとつの汚けれたるは是非せひなき事ことに候まうへども、人ひとの道みちを外はずる、罪つみは何なんとなされ候まうや。血統ちとつの耻辱ちじよくよりも不仁ふじん不義ふぎ無慈悲むじひの名なは更さらに耻はづべき事ことにて候まうはずや。

面おもあたり御諫ごいさめまゐらすれども御用ごもちひなければ最早もはや私わたくしの覺悟かくごすべき時ときと思おもひ定め申まを候まう、孫まごは捨すてられ嫁よめは虐しりたげられ不義不道ふぎふたうを眼前がんぜんに見みながらお側はたに侍はべり居まらんことなかく、に身みを判たらるゝよりも辛つらう候まうへば此儘このま永ながきお暇いとま申まをまゐらせ候まう。一人ひとり出家しゆけすれば九族きうぞくを救すくひ得うとか申まを候まう、是こゝより後のちは只ただ彌陀如來みだにょらいの御み手に縫ぬるより詮術せんすべも無な之な候まう。

只ただだいらしきは萬龜子まんきこにて候まう、物ものの辨わかりへもなき年頃としごろなれば言いひ聞きかせても如何いかにやと氣遣きづひ候まうが、私わたくしの一言ひとことに耳みみを傾かたむ候まうて、母様ははさまの仰おほせられ候まう事は露つゆいさゝかも過誤あやまちなければ、正ただしき事ことには生命いのちを捨すてゝも惜をしうは候まうは

すと涼しき眼に涙を湛へたる、見るばかりに胸つぶれ申候、僅に十一の春を迎へたるばかりなるに母の身としていかでか黒髪下ろさし得候べきされども此儘ありたらんには世心知りそむる年にもなり、人の妻ともならん時ありぬべし、左りとは汚れたる血統の絶えぬべき時あるべしや。心を鬼に此の儘伴れ申候。

正しき事も悪しき事も心柄にこそ候へ。御前様のお心一つにて何ともなりぬべき事にて候へば駟馬も及ばぬ御決心とは拜しまつれども今ま一度びお思ひ返しの程願上げり。今は斯くて候へども明日は何れの地何れの里にて萬龜子と二人遠く此の邸を偲びまゐらすべき、氣怯れする事さまゝあれば取急ぎ此の文書きのこしり……」

讀訖つた久満子は弗として書置を膝の上に載せた。

「馬鹿くく」と子爵は肥つた赭ら顔を一ぱいに張つめて怒鳴た。

「失敬な、不都合な、勝手に邸を飛出すなんて其れが人の妻たるものゝ行爲か、彼女は私を愚弄してるんだ、彼は芝居をしてるんだ、馬鹿、此位の事に嚇かされる私だと思つてるんか、お八重を呼べッ」

「お八重を？」と久満子は問ひ返す。

「彼奴が煽動したに違ない、確かに爾だ、よしッ彼奴も追出して丁へ」

十

「鳩ぼつぼくぼつぼくと飛で来い……」
太い調子外の聲と美しい鈴の様な聲が奇妙な諧調をなして室内に響き渡る、眞

中に搖籃を置いて正彦とお八重は互に推しつ搖かしつ、正の顔を覗いては笑ひ、笑つては互に顔を見交はす。宛然たる一幅の家庭和樂の圖である、父と母とに搖られる正は嬉しうに、こゝして電燈の光を見詰めて居る。

「あら又た笑ひましたよ」

「ふうむ、よく笑ふね、先刻什麼して彼様に泣いたんだらう」

「あれは産婆さんが抱いたからですよ」

「あの産婆は僕は嫌だ、彼奴は先刻妙な奴を伴れて來て正を見せて居たよ」

「什麼な人？」とお八重は直ぐ胸を轟かした。

「婆だよ」

「へえ」

「其の婆は自分の乳を吞まして居たよ」

「まあ」と言たがお八重は眉を擡めた。爾いふ事は此頃幾度もあつた。偶然した

ら正様を自分の手から離さうとしてゐるのではあるまいか、離した處で其れが此お邸の利益になる事でもあるまい。

「何でもないわ屹度、私が邪推をして濟まないわ」

お八重は恚う思ひ返した。

「鳩ぼつぼく……」

二人は又も唄ひ出す。と其處へ久保田の姿が現はれた。

「若様、殿様がお呼びでございます」

正彦は起て室を出る、と久保田は急に改まつて膝を進めた。

「お八重様、私は折入て御願がでございます」

「何でございますの？」

「御驚きになつては不可せんよ、宜しうございますか」と久保田は疑とお八重の顔を見詰めて、「御願といふのは正様の事でございますか」

扱こそとお八重は急に不安を感じた。其れは獸が獵夫の忍び足を嗅ぎつける様

に、ほんの一瞬の極めて鋭敏な直覺であつた。

「正様を什麼にかなさらうといふのですね」

「さあ其れでございまして」と久保田は頭に手を掛けたり膝を撫つたりして「誠にお氣の毒ではございませうけれども……」

「何なの？」

「實は恚ういふ事は誠に申にくい事でございますが、正様のお肥立は甚だ宜しうございませう、誰方が拜見しましても普通の御身體ではない様に思はれますので、そこで御親戚の方や殿様の仰せられますには、何分共彼の様なお子様がお生れになつては、左なきだに正彦様の事もある矢先、愈々御當家では悪い血統の様に世間に唄はれる事となりますので、此の際、涙を揮つて正様を里へ預ける事にしつた、恚う仰せられますので何卒其の……」

「里へ預けるの？」

「はい」

「預けて何時取戻すの？」

「はい其れは……」

「取戻さない積なんですか」

「まあ、爾いふ事で其のう……」

「ぢや他所へ與れてやるのね」

お八重は最早涙聲になつた。

正を抱いた正彦は既に去て明るい電燈の下に久保田とお八重は互に黙つて首低れた。

「ねえ久保田さん」とお八重は又もや氣を取直して言た。「什麼にかならないでせうか、什麼にかね」

「御察しは申しますが、何分今申しました次第で」と久保田は同じ事を繰返す。

「何をしてるんだ」と子爵は久満子を伴れて室に入つた。「久保田何時まで愚圖々々しても仕様があるまい」

「殿様、お願でございます」とお八重は子爵の前に兩手を突き、「此事ばかりは何卒お許し遊ばして下さいまし、正様は假令どんなお身體にしる若様と私のたつた一人のお子でございます、其れを什麼して手放せませう、生の母ですら持て餘す

程夜晝泣通しの脾弱なお子を他人の手に預けました處で誰が面倒を見て下さるでせう、乳が不足といふでなし私が病氣といふでなし、此儘に置て下さつた處で何もお差岡のある事ではございますまい、ねえ殿様、何卒〜何卒お許し遊ばして「許す許さんの問題ぢやない家名に關はる問題ぢやからな」と子爵は苦りきつて言ふ。

「御家名に關はると仰やつても、正様お一人のお生命には代へられますまい、世の中には人の子を貰ひ受けて里扶持を目的に商賣にしてる者が澤山ございます、爾いふ者の手に渡つたら見す〜正様が殺される様なものでございます、正様だつて貴方様のお孫様ぢやございませんか、脾弱なお子だといふ事を知ての上で貰ひ受けるといふのはどうせお金が欲しさの商賣に違ありません、貴君は正様をお殺し遊ばすお積でございますか」

「死ぬか死な〜いかは壽命だから仕様がないわね」と久満子は横合から言た。

久満子様」とお八重は恨めしさうに眼を向けて、「貴方も女ではありませんか、

些とは私の心もお察し遊ばして下さいませ」

「だけれども家名には代へられないと伯父様が仰やつたぢやないの」

「では家名のためには子供一人を殺しても宜しいと仰やるんですか」とお八重は

屹と顔を擧げた、其の唇は憤怒に慄へて居る。

「でも親戚會議で決めたのよ」

親戚會議？」

親戚の決議は尊重しなければならぬわ、伯母さんも其れに反抗して邸を出た

のよ」

「奥様が？」と言つた時、お八重の顔は生氣を失つた。「あゝ奥様が〜」

お八重に取て天にも地にも唯一の味方であつた奥様が邸を出たとあつては最早

纜の絶れた舟である。お八重の眼がぐらくと晦んで頭の心底が棍棒で打たれた

様に思つたが扱て凝と眼を塞つて胸を締めやうと努めた。

と此時廊下の方に正彦の争ふ聲がする。

「何をするんだ、僕とお八重の子だ」

「まあ一寸抱かして下さいませ」といふ聲は産婆のお早である。

「不可い〜」

どたんばたん音がしたかと思ふと、正彦は礫の如く飛んで来た、と此一刹那お八重は狂氣の如く立上がった。

「若様、正様をお渡しになつちや不可せんよ」

「お八重産婆が正を奪らうとするんだよ」

正彦は正を一生懸命に抱へてお八重の方に駆け寄る。

「渡してやれ」と子爵が言ふ。

「不可せん」とお八重が言ふ。

「いや渡せ」と子爵は立上がつて正彦の路を塞ぐ。蒼白めたお八重の顔はびりびり

りと痙攣を起した。

「何ですつて？」

「渡せといふんだ」

「貴方方はく」とお八重は血を吐く様に叫んで疾風の如く正を攫ひ込み確乎と

胸に抱へて屹と人々を睨んだ。「貴方方は此の子を殺さうとなさるんですか」

「何を言ふか」と子爵は怒鳴る。

「此の子を殺すなら私を殺してからにして下さい、あゝもう是つきりです、

私はね、若様と此お子が可愛さに今まで何れだけ辛い苦勞を承へて来たでせう、

一體私に何の科があつて恁那に苛めなさるんですか、私は幾ら何でも貴方方は華

族様だから、恁那無慈悲な事はなさるまいと思つて居ました。お邸では子供一人

の生命よりも家名とか親戚とかが大切なんでございますね」

「黙れ」と子爵は大喝した。

「いゝえ黙りません」とお八重は充血した眼を子爵に向けた。

「失禮だわ、豆屋の娘の癖に」と久満子が言ふ。

「豆屋の娘ですつて？」とお八重は死物狂に叫んだ。「豆屋は卑しい商賣だと仰や

る、爾でせう華族様と豆屋とは大變な遠です、けれども華族様は家名とか親戚と

かの爲めに勝手に子供を犬猫の様に捨てなさる、卑しい豆屋風情には爾いふ事は

少しも流行りません、私は解りました、私の父は毎も華族とがんどきは大嫌だと言て居ました、今日初めて其の意味が解りました、豆屋には名譽もなければ家柄もない代りに、孫を見殺しにする様な犬畜生は一人もありません、華族と豆屋の違は其れだけです」

「歸れ〜〜」といふ子爵の聲は憤怒に慄へた。

「歸りますとも、私は犬畜生ぢやありませんから此那犬小舎には片時も居やしません、歸りませう、歸つて物干の上から此方に向いて笑つてやりませう」

子爵も久満子も久保田も黙つて席を立つた。とお八重は急に泣き出したくなつた、疑と怵へて正の頬に我が頬を押し付け、振返ると正彦が疊の上に眠つて居る。

「あゝ若様」

彼女は枕元に座つて良人の寝顔を見詰めた。

「此の騒の中によつく眠つて被居やる」

淋しい涙が頻りに落ちる。

「若様！」と彼女は小聲に言た。「お八重はお暇をします、もう二度とはお目に掛れません、貴方は御當家の若様で被居やるから私と一緒にには出て行かれませぬわねどうかね、餘り他の人達に世話をやかせない様にね。……若様、一寸眼をお覺ましになつて正様を御覽遊ばせ、正様だつてこれがお父様のお顔の見納めでございませぬ……いえ〜〜愁ひお眼覺になると私も出にくい……若様！ 左様なら御機嫌好う」

立上らうとした時、怵へ〜た涙が一時に迸り出て拂へども〜雨の如く正彦の寝顔に降り落る。正彦はふつと眼を覺ました。

「お八重何を泣いてゐるの？」

「いゝえ何も泣いて居やしません」

「お前に泣かれると僕も泣きたくなるな」

お八重ははつと胸を衝いた。泣くも笑ふも私次第の若様を什麼して捨てゝ行かれやう。

「行きませう〜私と一緒に」

彼女は初めて聲を擧げて泣いた。

聖火

—

南に疊つた雲が重さうに綿の如く渦巻いて居ると、雲に近い星は恐怖に戦ぐ様に弱い光を放つて中天は紺碧の深い色を湛へて居る、折々暖かに風が屋根を渡り戸障子をかたつかせて浦島家の植込に突當り霎時揉みつ揉まれつ萬樹を噪がしたかと思ふと、急に死したる様に寂莫として僅かに闇に白き鉤屑をかざこそと音させて行く。雨にならうか、暴風にならうか、穏やかならぬ夜は更け初めて、寢静まつた町々に火の番の柝聲が昔の戀物語の夜の如く哀れに淋しい。

「なさけ宿」と書いた行燈が昨日の雨後の涼に映つて薄ぼんやりと宅平の裏手

に届くと其處に頰れかけた壁が下地の骨組を露はして居る。

六疊の狭い室に寢床を敷いて、其上に宅平は端然と坐つて居る。彼は何を見詰めるともなく室の一方を見詰めて居たが聽て手を伸ばして床の間から極めて舊式の鞆を引寄せた。鞆の中には反古紙や古新聞の切抜などが入てある。其の切抜を讀むのが彼の唯一の樂みであつた。

●自由黨大演說會 昨十三日神田錦輝館に於て自由黨大演說會を開く、會者無慮二千名、辯士は何れも當代の名流なるが、中にも大井馬城將軍、安部井磐根翁、を始めとして谷本宅平氏……

此處まで讀んで彼は口の邊に微笑を湛へた。今彼の眼前にまざざと現はれ來るのは當年の自分である、黒紋付に仙臺平の袴を着けて片手に短銃を持ち吾れ一發の彈丸あり以て東亞を蹂躪すべしと叫び、更らに片手に紙幣の束を持ち吾れに金力あり以て世界を濶歩すべしと卓子の上に胡座を掻いた時、來會者の顔は醉

へるが如くに昂奮して藩閥を打倒せと絶叫した。

「自由黨萬歳！」と彼は口の中で叫んだ、彼の眼は輝いて彼の眉は動いた、彼は宛がらに當年の若き血に胸を跳らして屹と口を結んだ、而して次の切抜を手に取た。たつた二行の雜報である。

●谷本宅平氏の結婚 同氏は今回紀州藩士浮田半藏氏の今嬢と華燭の典を擧ぐる事となる由。

彼は呵々と笑つた。が直ぐ又た唇を結んで凝と考へ込んだ、彼の全盛時代は此時に去りかけた、事業が失敗する、妻が死ぬ、忤が死ぬ、而してお八重は……

「お八重は〜」と彼は繰返して新聞を枕元に抛げた。彼の引締つた顔が弛んで眉が深く低れるとがつくりと首を折て我が膝を見詰める。膝は瘦せて鶴の如く、蒲團の上でも骨の底が痛い。

「お八重は」

涙が真直に頬を傳つて膝に落ちる。

「馬鹿く」

彼は誰を叱るともなく怒鳴た。と此時窓の外に聲がする。

「お父さんく」

はてなと彼は耳を敬てた。「僻耳か知らん」

「お父さんく」

彼は突然立上つて障子を開けた。電燈がぱつと庭に映ると其處に見ゆるは疑もなき娘のお八重である。

「あゝお父さん」

「馬鹿ッ」と宅平は戸を閉め切た。

「俺には娘がない、歸れく打殺されない中に歸れ」

二

「御立腹は御道理ですわ、けれども御父様、私は何の爲に浦島家へ行たのかといふ事を考へて下すつたら少しは私の心も察して下さい、ねえ御父様、御父様は毎も恩を知らなきや犬畜生だと仰やいました、私が浦島家へ行たのも虎さんへ恩返しをしたかと思つたからではありませんか」

お八重は障子の外に立て潛然と泣いた。

「恩返しだ？ 恩返しをしゃうといふなら他に幾らもあるんだ、親の敵よりも憎い浦島家へ行くなんて、俺は敵に身體を賣れと何時言た」

「だつて彼時には浦島家へ行くより仕方がなかつたんですもの」

「何故行た」

「お金が欲しいからです」

「金？」

「虎さんの仕事を助けるにやお金が一番大事だと思ひました」

「では果してあの千圓は」と宅平は腕を組むだ、瘦せた姿がありくと障子に映つて、ほうけた頭は病人の様。

「うんにや不可」と宅平は怒鳴た。「假令虎公のために身を賣たにしろ、其れなら何故此處へ歸つて來た、狂人にしろ何にしろ、一旦良人と定まつたものである以上は死んでも實家へ歸るべきものぢやない、俺はお前が出てから什麼な月日を送つて居たかと思ふ、どうせ身體は疵物になつたに違ない辛からう苦しからう、悲しからうと思ふとな、人には見せられない涙が出るんだ、其れも愚痴だと思ふものゝ、せめて性根だけは腐つて貰ひたくない、俺の娘だから心だけは普通りに

なつて居るだらう、俺は此位に思つて居たに、良人の家を捨て、勝手に出て來る

其れが女の道だと思ふか、歸れ、直ぐ歸れ」

「歸れませんわ」とお八重は縁に突伏した。

「歸らんか」

「歸ると此子が殺されますもの」

「なに？ 此の子？」

「此の子があると又しても氣狂が出たとあつては家名に係ると言ふんです、他所へやつて了はうといふんです、お父さん、西も東も何にも知らない此の子は、華族の家に生れたばかりに皆なに厭がられて野良犬の様に棄てられやうとするんです、此の子だつて生きて居たいために生れて來たんぢやありませんか、私の腹から出た子は貴方の孫ぢやありませんか、貴方の孫は今ま鬼の様な人達の手から逃げて貴方の懐に抱かれやうとしてるんです、其れを御父様は歸れといふんで

すか、其れでは何處へも行處がありません、ねえお父さん、どうぞ許して頂戴ね
お父さんく

聲を哽らして縁に伏し、起き上つては又た泣き續ける。障子に映る宅平の影法師は烈しく慄へて斷腸の氣色まざくと見える。

「ならねえ」と宅平は言た。

「どうしても不可せんのか？」

「お前が來たらお秀さんは什麼なるんだ」

「えつ？」

「お前にあんな苦勞をさして、黙つて見て居るお秀さんではない、お秀さんが逃げ出したら今までの恩返しが無駄になるぢやないか」

「でも御父さん、私には良人がありますもの」

「なに？ 良人？」

「若様も此に御一緒です」

「愈入れる事はならん」と宅平は唸つた。

三

「此處は華族の入る家ぢやない、お八重無慈悲の様だが俺は什麼しても華族は嫌だ、華族だつて善いものもあるが、俺には浦島家が嫌だ、お前が若様を伴れ込んだとあつては愈俺は入れる事がならない、金を強請の手段だと思はれちや俺ばかりか虎さんの耻曝した、俺はお前を入れる事はならん」
「では御父さん」とお八重は靜に立上がつた。

「解りました、では歸ります、若様と正様と三人一緒に何處へでも参ります、左様なう御父様……だけれども」とお八重は歩み出して又た立戻つた。「たつた一目お顔を見せて頂戴ね、貴方の孫を見て頂戴ね」

障子に手を掛けて開けやうとするを中から凝と制へて宅平は慄へ聲で言た。

「開けちや不可い、見る事も見せる事もならないんだ、華族と俺とは敵同士だ、

お前は敵の嫁ぢやないか」

「お父さん、其れや餘まりですわ、浦島家には恨があつても私達に何の恨がありませう」

力を籠めて開けやうとすれば力を籠めて開けさせまいとする、親子の手と手は

内と外で互に押しつ押しされつする途端に電燈がぼつと消えて眞暗間となつた。

「あら」と言ふまもなく虎吉は宅平の手を凝と取つてお八重の手に握らした。

「顔が見えなきや敵でもなけりや味方でもあるめえ、小父さんお願だ、二人の氣

狂を伴れて路に惱んでる旅の女を可愛さうだと思つてくんねえ、親子と言へば因縁が絡まつて此手を握る事もなるめえが、他人だく、他人の行倒を助けるのはなさけ宿の規則ぢやあんめえか、なあ小父さん、なさけ宿だ、えいなさけ宿だよ」

「虎さん」とお八重が言た時、宅平はお八重の手を確乎と握つた。

「虎さん、此の三人をなさけ宿へ伴れて行つてくれ」

「小父さん有難え」と虎吉は兩手を突いてお辭儀した。

虎吉に案内されて行く三人の姿を暗の中に見送つて宅平はころりと横になつたが其儘霎時動かなかつた。

「なあお八重ちゃん」と虎吉は感慨に堪へぬ様に。「お前も随分苦勞したね、本當に濟まなかつたよ」

「いゝえ、何でもないわ」

「いや並大抵の事ぢやない、俺は本當に御禮を言ひたいんだが何と云て可いか文

句が解らねえや、だが仍且因縁が深えな、恚うして歸つて来て又た元の通に一緒に居られるなんて此那嬉しい事はないや、俺よりお秀の奴は什麼に喜ぶか知れやしない」

虎吉はほくく喜んで先に立た。

「お八重、もう何か言ても可いかへ」と正彦は初めて口を開いた。

「はい、何なりと仰やいませ」

「さあ何を言はうかね」と考へる。

「氣の毒だなあ」と虎吉は嘆息した。

四

お八重の顔を見たらお秀は什麼に喜ぶだらう。恚う思つて虎吉は急ぎ足で我が家へ歸つた。

「お秀御客様だよ」

返事が無い。

「お秀く」

呼ばはりながら奥へ通るとお徳が一人蒲團の中に包まつたきりでお秀の影もな

い。

「お秀く」

二度三度呼んだが矢張音もない。

「まあ家へ上がつて待てくれ、呼んで来るから」

お八重夫婦を中へ入れて虎吉は裏を一廻り其れから井戸端へ出た。とお秀の泣

聲が聞える。彼は吃驚して立止まつた。

「何をなさるんです」とお秀は叫んだ。

「一緒に行くんだ」と男が言ふ。

「誰だらう」と虎吉は暗に透して向を見た。

「是まで言っても解らないの？」

「解らないよ」

「ちや什麼すれば可いの？」

「俺の鼻は俺の所有だ」

「失禮な事を言ひなさるな、私は貴方の何でもありません」

「何でもなければ其れちや何だ」

「戸籍に入つて居ませんよ」

「戸籍などは什麼だつて可いよ」

虎吉は思はず聲を立てた。

「長次ッ！ 彼奴は生きてるんだ」

如何なる驚愕と雖も此時に比ぶべくもない。彼は脊髄から水銀を流された様な気がした。

「生きて居たんだ〜」

此時、長次はぐつとお秀の腕を捕へた。

「金を出すか」

「厭です」

「小兒を返すか」

「厭です」

「俺の鼻になるか」

「厭です」

「よしッ、其れぢや虎的に會つて來やう」

「長次さん」とお秀は絶り付いた。

「そんなに私を背めなくたつて可いちやないの？ 私は今までどれだけ貴方にお

金を出してあげたでせう一度ならず二度ならず五度 六度も……もう御終にする

と言つて嘘を吐くのね、其れでは私餘まり虎さんに濟みませんわ」

「可いよ、お前には用がないよ」と長次はせゝら笑つて「俺は虎的に用があるんだ」

「殺して下さい」とお秀は狂的に走り立塞がつた。「私を殺してからにして下さい」

「放せ」

「放しません」

「放さねえか」

「死んでも放しません」

「よしッ」

拳骨がお秀の頭に閃めいたかと思ふと長次の身體が筋斗打て倒れた。

「馬鹿野郎！」

「あゝ虎さん」

お秀は虎吉の姿を見るや否やだち／＼と背後に退つた。

「馬鹿野郎！」と虎吉は再び叫んだ、岩の如き拳が二つ長次の喉首に並んで、ぎ

ゆうの音も出させずに締め付けると、長次の五體が玩具の人形の如くがたり／＼と氣味悪く動いた。

「お止しなさい」とお秀は虎吉の兩腕に身を投げかけ「此の人を殺して什麼なさるの？ 虎さん」

「なに？ 殺すっ」

虎吉は初めて氣が付いたかの如く手を緩めたが、ひたりと地に坐つて兩腕を拱んだ。

「お秀、お前と別れなきやならねえ」

五

お秀は棒の如く立竦んだ。

「什麼して？」

「長次の所有は長次に返すんだ」と虎吉は叫んだ。

「私は長次の所有ではありません」とお秀は屹となつた。

「いや長次の所有だ」

「何故です、長次とは既から離縁を取りました」

「離縁をしたつてお前は長次の噂だ」

「何故です」

「何故だか解らねえ」と虎吉は行塞る。

「何故です」とお秀は更に詰め寄つた。

「あゝ何故だらう」と虎吉は坐つた儘腕拱をして。「何故だか知らねえが俺にや其那氣がするんだ、爾だ俺にや其那氣がするんだ」

「虎さん、其れちや今まで私を女房だとは思つて居なかつたの？」

「今までは思つて居た」と唸る様に言つて。「長次を見たら爾思へなくなつた」

「其りや餘まりです」とお秀は歎歎げた。「私は長次の處へ歸るべき筈がありません、私は貴方の女房です、私は何處へも行きたくはありません」

「其りや不可え」と虎吉は立上がつて凝とお秀の手を握り、「今までの事は夢と諦めてくんねえ、なあおい、お前と俺とはほんの一年の間柄だな、其れでも十年も二十年も連添ふた様な気がする。何處へ行たつてお前と俺の様に仲の好い夫婦は無いつて皆なが爾言た、全く爾だ、お前は随分俺に親切にしてくれたね、此で別れたつて俺は生涯忘れやしねえ、考えて見るとお前は長次の噂といふんでなし、何も今更ら絶れるの何のといふ法が無え譯だ、だけれども俺は氣が濟まねえんだ、什麼してもお前を歸してやるのが人間の道の様な気がするんだ、妙なものだ、此那事で別れ話にならうとは思はなかつた、あの時に俺が思ひ切りさへすれば何の事もなかつたんだ、仕方が無え、諦めてくれ、夢だと諦めてくれ」

「虎さん、私諦められると思つて？」

「濟まねえな」と虎吉は嘆息した。自分は男だから此の苦痛に打勝つ事も出来やう。弱き女は果して打勝つ事が出来やうか、虎吉は我が身の辛さよりもお秀の辛

さを思ひやつた。

「俺もお前も年が若え、これから何十年生きてるか知らねえが、其の長え間こんな辛い思をして暮らさにならねえかと思ふとお互に一寸先は眞暗だな、なあおい、俺は何時でも是から何かおつ始めやうと思ふ時に必らず邪魔が入つて仕事が出来なくなるんだ、折角東京へ出れば泥棒の親分に攫はれるし、漸やく商賣が巧く行たと思へば御嬢ちゃんの手で人殺しをするし、其れからお前と夫婦になりなさい、宿が出来て此な嬉しい事がないと思へば、お前と別れなきやなくなるし俺は何かに添養はれてるんだ、人の運だ、なあお秀、運てえ奴にや勝たれねえな」

お秀はわつと泣き倒れた。長次は何時の間にか姿を匿して見えぬ。

お八重は正彦と共に虎吉の家に居た。何時まで経ても虎吉とお秀は歸つて來ぬ。

「僕は眠いな」と正彦が言ふ。

「えい、お寝みなさいまし、さあお床を伸べませう」

勝手知たる押入を明けて蒲團を敷くと、汚ないとも言はず其儘ころりと横になつて聽て快ささうな鼾が聞える。

「御父様のお傍に御ねんねをなさいまし」

正を寝かし付けた傍にはお徳が眠つて居る。一人は狂者、二人は赤兒！ お八

重は二人の赤兒を凝と見比べた。

不思議な謎である。先天的に祖先の悪血を稟けて是から萬人嘲笑の的にならうといふ暗い前途を有せる正！ 盜賊の血を稟けて居ながら情ある人の手に暖かに

育ち行くお徳！ 一は華族の家に生れながら生れ甲斐もなき身！ 一は貧家に育

ちながら光と生命とある身！

「こんな幼さな赤兒でも生れるときから生涯の運が決まつてるんだ」

思う思つてお八重は潸然と泣いた。

「私は什麼して恚う不運なんだらう」

涙を拭いて又た良人の顔をつくつくと見る。外は暴風吹き荒んで屋根も戸板も飛び去りさう、凶惡な天候は眠つた町々を脅やかして居る。けれども正彦は快く眠つて居る。唇には微笑を含んで安心の面影が眉宇麗に漾うて居る。

「私がお傍に居ると思つて安心して被居やる」

お八重は吻と呼吸を吐いた。

「若様さへ居ればく」と彼女は繰返した。「若様が私を可愛がつて下さる、此那汚ない家に居ても毫も厭なお顔もなさらずに寝んで被居やる、私だつてく、私

だつて若様があれはこそ憐うして什麼な苦勞でも休へられるんだわ」

心の底から眞實いとしい懐かしい戀心が夏雲の如く簇がり出る。お八重は自分の嬉しさを深くく味はつて眼を濡ました。風は益々吹募る。

と戸の外に歎歎の聲が聞えた。

「誰方？」と言たが返事がない。

「誰方？」

戸を開けるとお秀が呆然立て泣いて居る。

「あゝお秀さん」

「お八重ちゃん」とお秀はお八重の胸に縋り付き子供の様に聲を立て泣いた。

「什麼したの？」

「虎さんはねく、別れて了つたのよ」

「什麼して？」

「長次に逢つたんですもの」

「えつ？」と言たきりお八重は蹠踵と室内へ倒れかけ漸と踏み止まつて。

「もうお終だわ、私が彼那に苦勞したのも何の役に立たなかつたわね、あの長次の事だつて……」

「長次を知つてるの？」

「えい」

「ではお八重ちゃん、長次が毎も俺に金箱があると云てたのも貴方の事ぢやないの？」

お八重は微かに首肯いた。

「濟まなかつたわく」と秀は叫んだ。と此時宅平の家に雷ならぬ物音が聞えた。

お秀に別れた虎吉は其足で直ぐなさけ宿へ行た。情宿には七八人の勞働者が宿まつて居る。飴屋の爺さん、羅字のすげ替へ、剪剃刀磨、石荷に下駄の齒入、其外に三公が監督として宅平に代つて昨日から宿まりに來て居る。

「皆な起きろ」と虎吉は言た。

「何だ〜」

一同は寢耳に水で眼をこすり〜起き出した。

「済まねえが皆な此に並んでくれ」

「什麼したてえんだ」と三公はぶつ〜言ひながら列を作らした。

「済まねえ、全く済まねえ、稼ぎ人を起して氣の毒だなあ」と虎吉は一同を見渡

して「飴屋の爺さん寒さうだな」

自分の羽織を脱いで爺さんに着せ。

「扱て一同」と改まつた。

「お前達は俺を何と思ふ」

「何を言てるんだ」と三公が言ふ。

「いやお前達は俺を何と思ふ」

「親方だと思ふ」と一同が答へる。

「親方でえものはな、人の頭に立つものだ、可いか、皆なに崇められても躰裁が

悪く無え人の事だらう」

「爾とも〜」

「爾だ、全く爾だ、して見ると俺はお前達の頭になれねえんだ」

「什麼して？」と一同はざわついた。

「什麼も慫うも無えや、俺は人間の中で一番耻づべき事をした、俺は人間でなくなつた」

「虎的！」と三公は叫んだ。「お前氣が狂つたのか」

「氣が狂ひやしねえ、俺は寧ろ狂氣になりてえんだ、可いか、俺は姦通をして居たんだ。」

「えつ？」と一同が驚いた。

「爾だ姦通だ、俺の鼻に亭主があるんだ、死んだと思つた亭主が生きて居たんだなあおい一同、俺は長次でえ惡黨を殺して自首をしなかつたのは其奴の女房が妊娠で困つてるから其れを救つて罪滅ぼしをしやうと思つたからだ、いや其ればかりで無え、なさけ宿を作えて世の中の利益になる事をしたら少しは殺人の罪も消えるだらうと思つたんだ、其れがお前、本當に爾いふ綺麗な氣で生きて居たのか表面ばかりが其れでも心の中にお秀を女房にしたいといふ計畫があつたのか、自

分で自分が解らねえ、でなければ殺した奴の鼻を自分の鼻にされる譯のもんぢやねえ、處が長次が生きて居た、死んだと思つた奴が生きて居た、今夜の今、初めて其れが解つたんだ、俺は姦通をして居たんだ、お前達には今まで言ふに言はれねえ程世話になつたね、お前達は俺の様な者でも能く兄貴とか親方とか言つて立てゝくれたね、全く俺はお前達が可愛い、お前達に別れたくねえ、けれども姦通をして居る様な人間を親方に有てればお前達の耻辱にならあ、俺だつてお前達に耻を搔かせる様な事はしたくねえんだ、皆な立派になつてくれ、世の中の利益になる事をしてくれ、眞面目に働かさへすれば屹度幸福になるんだからな、可いか、おい、俺だつて別れたくねえんだが仕方がねえ」

「べらんめえ」と三公は叫んだ。「其那事は姦通でも何でも無えや」

「何でもなくても俺の氣が濟まねえんだ」

一同は黙つて虎吉の顔を見上げた。虎吉は更らに續ける。

「其りや世間體から言ふと、お秀は長次の鼻でも何でも無い、俺が亭主になつたて差間が無え筈だが、俺は何してもお秀が長次の鼻の様な氣がするんだ、だから氣が咎めてならねえ、俺は自分の心に疚しい事があるのは大嫌だ。だから何しても別れなきやならねえ」

「虎的！」と三公は虎吉の胸元に縫り付いて泣いた「お前何しても別れる氣か」

「仕方が無えよ」と虎吉は屹と言ふ。

「左様なら、皆な眞面目に働いてくれ」

「何してもく〜」と三公は手を放さない。

「三公！ 放してくれよ」

「いや放さねえ」

「後生だから放してくれ」

「いやだい〜」と三公は小兒の様に首を振って「いやだい」

「放してやれ」と障子の外から宅平の聲がした。

「おう小父さん」

「虎吉！」と宅平は蒼白めた顔をして凝と虎吉の顔を睨め。「能く言た、お前は男だ、本當の男だ、別れて行け」

「小父さん何を言ふんだ」と三公が怒鳴つた。

「姦通でもないものを姦通だと思ふ、虎吉の心は潔い〜心だ、人が許しても自分ですさぬ徳義の心は何人と雖も枉げる事は出来ん、丁度私が華族の妾になつた

お八重を許す事が出来ないと同じだ、皆な止めるな、虎公行け、而してお前の氣の濟む様にしろ」

「小父さん濟まねえな」と虎吉は涙をほろ／＼零した。「年老たお前には是から又た苦勞をさすかと思ふと俺は濟まねえ」

「馬鹿な事をいふな、行け／＼お前の思ふ通りにしろ」

「ちや左様なら」

虎吉はぎゆつと宅平の手を握つたかと思ふと身を翻がへして飛ぶが如くに去た「待てよ虎的！」と三公は大聲を擧げて逐うて行く。

其の後を凝と見送つて宅平はぼろ／＼と涙を流した。

「俺は／＼／＼」と宅平は言た。「俺は何處へ行たら可いんだ」

なさけ宿の者共は涙に暮れながら首低れて居る。

「暗だ／＼、善人が滅んで悪人が蔓るとは何の事だ」

兩手で髪を撈る様にしながら室を去ると後は五燭の電燈がぼんやりと人々の泣顔を照らした。

家へ歸つた宅平は茫然と坐つた儘睡を一所に集めた。

「什麼しても解らねえ、倅は華族の犬のために死んで了ふ、娘は華族の狂人の妾になる、家は華族の工事で歪んで了ふ、何の手柄もなく先祖のお蔭で飯を食つて華族が益々榮えて、眞面目に働く虎吉が死ぬより辛い目に逢つて居る、暗だ暗だ世の中は暗だ」

彼は腕を伸ばして例の古反古を取出した。

「皆な暗だ、俺にや過去もない將來もない、娘もない、孫もない」

一束の反古を攫んで火鉢に燻べたまゝ、ころりと倒れて兩手を眼に當てた。古反は燻り初めた、煙が黒と白と鈍色に漲つて見る／＼室を暗くした。宅平は動かすに泣いて居た。煙が一段と濃くなつてばつと燃え出したかと思ふと、其れがへ

らくと障子に燃え付いた。

九

「何處まで從いて來るんだ、もう歸れ」

「何處までだつて可いやい、お前の世話にやなりやしねえやい」

「何でも可いから歸れ」

「歸らねえやい」

虎吉が崖の路を上ると三公は泣きながら後を從いて行く。二人は久世山の頂に立た、其處から音羽の人家や目白臺が一目に見渡される。

「お前什麼しても歸らねえのか」
「什麼しても歸らねえや」

虎吉は魂氣が盡きて其處に腰を下した。二十日餘の月が南がしらに破鍋の様に懸つて、折々狂氣の様に吹いて來る暴風に薄く濁つた光を垂れて居る。

「あれを見ねえ」と虎吉は眠れる町々の中にぎらくと光つて居る亞鉛葺の屋根を指さした。「彼處はなさけ宿だ、あの屋根が彼處に見えるまでに俺は何れだけの苦勞をしたらう、俺よりも苦勞をしたのはお八重ちゃんだ、其れから小父さんだ、お秀だ、お八重ちゃんは千兩の金を作えるために狂氣人に身體を賣た、小父さんは娘一人を無いものにした。此の二人はなさけ宿の恩人だ、什麼な善い事をするんでも、おいそれと直ぐには出來ねえ、昔は橋を造るに人間を川に埋め込んで人柱を立てたものださうだが橋は世間の利益になる道具だが、其の道具のために人間が死なけりやならねえのだ、なさけ宿だつて爾だ、お八重ちゃんと小父

さんが人柱に立たんだ、お秀だつて爾だ、俺だつて爾だ、だが俺は何の役にも立たねえ、詰らねえ人間だ」

恁う言て虎吉は遙になさけ宿の行燈の光と覺しき方を見やつて感慨に堪へぬもの、如く眼を瞬たいた。

「俺は幼せえ時から働き通しに働いて來た、其れでさへ此の通だ、なあ三公、俺は什麼すれば可いんだか解らなくなつたよ」

「什麼も恁うも無え、元の通になつてくれよ」と三公が言ふ。

「幾度言ても同じ事だ」と虎吉は立上つて、

「左様なら！ なさけ宿！」と口の中で言た。

「左様なら！ なさけ宿の人達！ 小父さんにお秀！ 徳坊！」

涙がぼろり／＼と落ちる、彼は拭かうともせず涙の流るゝに任した。

「左様なら三公！ お前にも世話になつたな」

「勝手にしやがれ」と三公は後背を向いて泣いた。

「左様なら」

戀々として虎吉は去るに忍びなかつた。畢世の力を振つて建てたな、なさけ宿！

たつた一夜の中に自分の手から放さねばならなくなるとは夢にも思ひ及ばなかつたであらう。

「左様なら」

最後の一言を残して三公の手を握つた。

「お前と俺とは日が浅えが仲の好い友達だつたなあ」と三公が言ふ。

「達者で働けよ」と虎公が言ふ。

「おい」と泣く。

「喧嘩なんかするんぢやねえぞ」

「おい」

「お母親や婢や子供を大切にしてくれよ」

「おい……待ちねえ」と泣いて居た三公が叫んだ。「虎的！ 火車だ」

「何？」

「なさけ宿の方だぜ」

いかにもなさけ宿の前にちろり、と真赤な炎が舌を出して居る。

「三的來いッ」虎吉は足を返して真直に崖を走り下りた。

十

火元は果して宅平の宅である。警鐘が亂打された。町々は眠から覺めた。折か

らの南風は火の手を煽つて見る／＼二階の家根を突き抜けた炎はけた、ましいい音と共にばつと火の粉を降らすと、四邊の家根／＼は晝の如く明るい。

「小父さん處だ」

「豆屋さんだ」

人々は叫びつ走りつ駆け集まる。提灯が飛ぶ、唧筒が来る、どつた返した騒の中に虎吉と三公が炎を犯して火柱の中を潜つた。

「小父さん／＼」と虎吉は呼んだ、音が無い。

「小父さん／＼」と三公も聲を合はした。仍且音が無い。此時臺所の柱が黒煙と共に崩れた。ばつと擴がる炎の中に宅平の泰然として坐つてる姿が見えた。

「小父さん、早く逃げてくれ」と虎吉は矢庭に宅平の手を取た。

「構つてくれるな、俺は死ぬんだ」と宅平は言た。

「馬鹿を言ふない」

虎吉は宅平の襟髪を攫んで二三間引摺り出し、「三公！ 小父さんを何處かへ伴
れて行て縛つて置け」

「よし来た」

三吉は宅平を抱へて外へ出る、此時南風が一段と激しくなつた。

「危ないぞ虎さんく」と人々が叫ぶ間もなく家根は風に煽られて恐ろしく美しい光を亂射し出した。あつといふ間に虎吉は素早くも潜り抜けて霧々地になさげ宿へ走つた。

「皆な居るかッ」

大音聲に呼ぶと家根の上に鈴生をして居る群集の中から答へる。

「虎さんが来たく」

「大丈夫だ、俺達は死んでも此處を焼かせねえよ」

「頼むよ」

虎公はお秀お徳お八重夫婦の事を思ひ出して我が家を見返ると、店は既に炎に包まれて居る。虎吉は夢中になつて闖入した。

「お秀！ お八重ちゃん！」

焦げ付きさうに熱い中を臆面もなく走り抜け走り廻つた。一人一人の影も見えない、而して此の生命賭の場合に彼は不圖柱時計が眼に付いた。時計が今ま二時を打たうとしてる事まで明瞭と意識した。

「お秀！ お八重ちゃん！」

幾度呼んでも答がない。「巧く逃げたんだらう」

彼は炎の中を抜けると殆んど同時に家がめりくくと倒れて、風に飛ばされた魚虎と書いた障子が逆風に火の中に突立たのを見た。

火は風を生み風は火を強めた、金砂を散らす様に火の粉が闖空に散ると天は只だ一面の紅！ 唧筒の水の音、物の壊れる音、叱聲罵聲叫喚の響宛がらに地獄の

戦車を見るかの様！ 其處らは只だ一面の火の海！ 炎の河！
火と水と戦つた、水は火に敵し得なかつた、風は火を助けて益其の戦線を擴める。恚うなると最早手の付け様もない、逃げ場に迷ふ老若男女は悲鳴を擧げて救を求め。

「風下へ行くな〜」と家根の人々が叫んだ。

「崖へ上れ！」

「浦島の邸へ逃げろ」

實際、此の場合浦島家の邸へ逃げ込むより外に途がないのである。人々は崖を攀ち登つた。と此時又た一段と叫喚の聲が聞えた。

浦島家の離室に飛火がしたのである。

十一

「わあつ」と遠巻の人々は喝采した。

「ざまあ見ろ」

「浦島に火が移つた」

「もつと風が吹げ、俺の家なんか焼けたつて可いから」

誰一人浦島を救はうとするものもない。高臺ではあり宏壯を極めた建物が炎に包まれて半空に光を迸しにして居る。四邊の人家は赫灼と照らされた。

「誰か行てやれ」と虎吉が下から叫んだ。

「打棄て置け」

なさけ宿の家根には止宿人共を初めとして町内の若い者達、雨と降り来る火の

つゝある。虎吉は眼敏くも人影を見付けた。

「お八重ちゃん、お秀！ 徳坊！」

ぱつと漲る黒煙の中を突進すると其處に倒れてる一人の男がある。虎吉は矢庭に其の足を攪んだ、が此時彼は自分自らも危急の場合にある事を覺つた、見よ！ 何とも知れぬ臭氣の黒煙が瞬く間に翼を擴げて自分を包まうとして居るのではな
いか。

「しまつた」

虎吉は疊に突伏した、そして件の男を確乎と抱きしめながら、そろり〜と匍
匍ひながら煙の中を抜けた。

火は早く母屋の大半を嘗めた、虎吉は吻と呼吸を吐いて件の男を見下した、男
は片手に鍵を持ち片手に錦の囊を持って居る、囊は焼けこぼれて中から昔の大判小
判が食み出して居る。

「呼吸が塞つたんだ」

俯伏した男の背中を持って扶け起し人工呼吸を施さうとする一刹那！ 彼は愕然
と驚いた。

「長次！」

十二

「長次！」と彼は再び言った。助けやうか助けまいか、是を助ける事は容易い事である。是を殺すのも容易い事である。此儘に抛て置けば自然と死ぬ、長次が死ぬばお秀と夫婦になれるのだ、戀ひ戀はれた二人の縁が再び結び付く事が出来るの

だ

殺さうか生かさうか、殺せば自分の幸福が得られる、生かせば半生を無にせねばならぬ、虎吉は長次の煙に燻ぶつた顔を兎つ角つ睨めた。と廊下の火の手は一段と烈しくなつて次の一棟に移らうとする途端、火柱が恐ろしい音を立て、瓦落くと崩れ出して二人の上に倒れた。虎吉は機弾仕掛の人形の如く跳び上つた。小腋に確乎と長次を抱へて居る。

「長次！ 確乎しろ」

松の下に抱下して聲を掛け、背後に廻つて活を入れると長次は微かに眼を開いた。

「しつかりしろ」

「おう虎的か」

長次は慫う言て虎吉の顔を見上げ。

「お前が助けてくれたのか」
「うむ」

「爾か」と長次は口をもぐぐさして「餘計な事だ」

此時雷ならぬ叫喚が左の方に聞えた。

「助けてやれい」

「家根へ上るな」

「早く降りろく」

と見ると白煙黒煙が浦島家の敷奇を極めた座敷の方に漲つて、濁水が一時に決する如く渦を巻いた炎が金泥の唐紙の中に吸ひ込まれると書院窓から一度に迸り出して天井に青い火がめらくと纏ひ付く。其の火光の中に狂ひ廻る人影！

「お八重ちゃん、お秀」と虎吉は叫んだ。實に其れは正を抱いたお八重と正彦、お徳を抱いたお秀の五人である。火の手は最早一面に狂ひたいだけ狂ひ暴れたい

だけ暴れる。其れに遮ぎられて五人の姿が折り／＼見えなくなる。

「お八重ちゃん、お秀」

聲を限りに叫べど聞えさうにもない、炎々たる猛火は益々擴がつて虎吉は一步

も踏み出す事が出来なくなつた。

宅平の家の火を逃れて崖に上つたお秀お八重の五人は逃度を失つて運悪く風下へ／＼と走つた、足弱共の走るよりも風に煽られた火の力が疾い、五人は段々炎に押詰られた。邸内の案内はお八重が知て居る。けれども狂者の良人と乳呑兒を抱へた彼女は殆ど前後を忘れて了つた。今ま彼等は猛火に追詰められて居る、背後は二丈餘りもある崖の石垣である、彼等の取るべき道は只だ二つとなつた。崖から落ちて碎けて死ぬか、炎に焼かれて死ぬか、何れにしても歸する處は死である。彼等には生くべき法がない。

「お八重ちゃん什麼しませう」とお秀は言た。

「お秀ちゃん什麼しませう」

二人は手を取り合つて泣いた。

十三

「どうせ憊うなれば」とお八重は覺悟を決めた。「もう逃げられないわ」と彼女は秀を顧みた。

「お秀ちゃん！ 死にませう、此儘死にませう」

憊う言て正彦の方を見ると、正彦は只呆然とお八重の顔を見詰て居る。

「若様、貴方も覺悟をなさいませ」

「何の覺悟だ」

「死ぬんですよ、私と一緒に死ぬんですよ」

「死ぬのかへ」と首を掉つたが直ぐ。

「あゝ可いよお前と一緒になら可よ」

「私は死にたくない」とお秀は泣いた。「私はもう一返虎さんに逢はなきや死ねな

いわ」

狂人ながらも良人と我が子と三人共に死ぬ事はお八重に取て寧ろ幸福かも知れぬ。併しお秀には道侶がない、火は刻一刻に迫つて來た。正とお徳は聲嘎れ盡き

るまで泣きしめる。

「お秀ちゃん、もう是つきりだわ」

「あゝ仕方がないわね」

「せめて子供だけはね」

「お八重ちゃん、子供だけは……」

崖に突出した松の枝に二人の子供を括り付け、狂ひ逆巻く炎の前にお秀お八重正彦は靜に合掌して坐つた。

虎吉はお秀等の姿をちらと見るより狂氣の如く尋ね廻つたが、炎に隔てられて什麼する事も出来なかつた。彼は聲を限りに二人を呼ばはりつ今しも燃え付かうとする二階家の下へ辿り付いた。下は只だ一面の火の波である。めり／＼と引裂く様な音と百獸の吼える様な音が一度に合すると歩厚な椶の天井板は頑強に抵抗する如く炎に捲かれながら動かうともせぬ。天井に阻まれた炎は更らに激して一段と力を加へた、見る／＼柱が眞赤になつた、炎の先鋒が二階の外から内部を覗くと見る間にけたましく燃ゆる音が内部に起つた。此の二階が落ちたら避難の人々は悉く押潰されるだらう、其の中にはお秀やお八重が居るんだ。慙う思ふと虎公の眼は眩み出した。

「何を糞ッ。死んでやれ」

虎吉は霧々地に火の中に突入した。と彼は直ぐ自分が餘りに早計であつた事に気が付いた。向ふは行止まりである。大きな階子段が綺麗に拭き込まれた木目に一點の痕も留めず泰然として路を塞いで居る。

「しまつた」

憊う言て引返さうとすると火は既に背後に廻つて居る。此時男女の叫喚が聞えた。虎吉は前後を忘れて階段の横の壁を力に任せて蹴た。大力の虎吉に蹴られた壁は脆くも大きな龜裂を見せた。一度二度三度、四度目に彼の身體を入るゝに足程の大きな穴が明いた、彼は遮二無二突き進んだ。進んで幾つもの障子を蹴倒し、縁側に出ると其處は面を向けやうない炎である。黒い煙が底陰をして寄せて来る。彼れは直ぐに地に跳下りた、而して鼻を地に磨りつける様にして四邊の物音を聞澄ました。

「もうおしまいです」

「お秀ちゃん、確乎なさいね」

二人の聲が虎吉の十歩前に聞えた。

十四

虎吉は跳り上がった。

「お八重ちゃん、お秀ー」

「あゝ虎さん」

虎吉の姿を見て二人は泣き出した。

「虎さん死にませうーとお秀が言ふ。

「うむ死なう、俺も其の覺悟で來たんだ、どうせ生きて居たつて詰らねえ身體だ」
「一緒に死んでくれる？」

「あゝ死ぬとも」

聲の終らぬ中に二階は恐ろしい響をなして炎がばつと屋根へ突き抜けた。と風に煽られた建物はぐらりと動き出した。火の山が五人の頭に崩れんとする
のである。

「皆んな覺悟しろよ」

聲の終らぬ中に虎吉の手をひんづと攫んだものがある。

「虎的逃げろ」

「お、長次か」

「逃げろ」と長次が言ふ「梯子を持って來た」

いかにも崖に繩梯子が掛つてある。

「お前持て來たのか」

「ぐづぐづ言はずと早く逃げろ」

長次はお八重正彦お秀といふ順序に梯子から下し、松に括つた二人の子を虎吉に渡し。

「お前も行け」

「お前から先に降りろ」と虎吉が言ふ。

「うんにや俺は……そら崩れるぞ早く行け」

「お前が先に逃げろ」と虎吉は動かない。

「馬鹿言へ、文句は後でも言へらあ」

恚う言て長次は虎吉を強て梯子に攫まらせ其上から凝と手を握つて涙をはらはらと零した。

「虎的！ 今までの事は勘忍してくんねえよ」

「何を言ってるんだ、さあ直ぐ降りて来い」

「いや降りねえ、俺はなあ虎的、お前に助けられて初めて俺が什麼してもお前に敵はねえといふ事が解つた、俺は死ぬんだ」

「なに？」と虎吉は降りかけた梯子から躍り上らうとした。

「待て」と長次は遮つた。「俺の子のお徳を助けると思つたら早く降りろ、お前はどうか其の子の親父になつてくれ」

「馬鹿な事を言ふな、お前が改心すれやお秀だつて……」

「いや不可え、俺は悪人に生れて来たんだ、今改心しても、長え間には又た悪い事をするからな、俺の様なもの死ぬ方が可いんだ」

「長次！」と虎吉は呼び掛けて再び上らうとする時、長次は聲を限りに叫んだ。

「早く降りろ、二階が崩れたら其の二人の子は什麼なると思ふんだ、手前も死に

たけりや子供を置いてから来い」

「うむ」と虎吉は詰まつてすくくと梯子を降りた、其れを疑と見下した長次は虎吉の足が地に着くのを見るや否や梯子をさらりと外した。

「虎的、俺の子の親父になつてくれ」

一段と烈しい南風が、火柱を一左一右に動かしたかと思ふと、崖の上は炎の海！ 長次の姿が見えなくなつた。

十五

さしにも廣き浦島家は音羽九丁の町に火の子を降らして高臺に炎の山車の如く

燃え盛る、けれども誰あつて救はうといふものもなかつた、下の人々は悉く自分の屋根に上つて見世物を見る様に上を見上げて居る。一棟づゝ崩れる度毎になさけ宿から喝采の聲が起つた。

火の手は次第に弱つた、燃えるだけ燃えたら消えるだらうと人々は言囃した。浦島家の人々は秋國家へ難を避けた。種々な道具や夜具や箱などが慘くも泥の中に積まれて中には半ば焼けたのもある。其れすら出入の者の外は手傳ふ者もなかつた。

火元に最も近いなさけ宿は最も堅固に護られた、壁も板目も亞鉛の家根も眞黒に燻ぼつて其上に立つ人々の肩に火が燃え付きさうなな拘はらず彼等は一步も退かなかつた。

大火の後の曉は更にものゝしくかつた、火柱が其處此處に峙つて、其れが崩れ渡ればつと燃え上る、火事場が明るいだけに天が暗い、暗い空は僅かにぼんやりと焼け色が動いて、静かな星の光が冷たく瞬いて居る。

虎吉はお秀お八重正彦等を連れてなさけ宿へ歸つた時、人々は歡喜の聲を擧げた。

「おい皆な」と虎吉は言た。「浦島が焼けたがなさけ宿は焼けない、お前達は什麼思ふ」

「解つてるぢやねえか」と三公が言ふ。

「爾だ解つてる、俺は初めてなさけてえものが一番大事だといふ事が解つた、なあおい、世の中はなさけだ、此のなさけ宿だつてお秀とお八重ちやんと俺のなさけから出来たんだ、して見ると是からもつとくなさけを擴めなけりやならね

「爾ともく」と人々は答へた。此時木蔭に立た正彦が叫んだ。
「お八重！ 夜が明けたよ」

「えつ？」

「そら太陽が出るよ」

向の丘に隔てられた朝日は今しも搖曳く雲を蹴つて黄金の光を虚空に散らして居る。

「あゝく」と人々は喝采した。

「何といふ綺麗なんぞせう」とお八重は抱いてる正を其方に向けた。

「お秀！ お前と二人で憊ういふ朝日を拜んだ事があつたけな」と虎吉は言ふ。

「あの時の様になつて下すつて？」

「あゝなるとも、太陽様はなさけの親玉だ」

お秀は突如虎吉の胸に顔を押付け嬉し泣に泣いた。

「若様」とお八重は正彦の手を取た。

「若様にだつてお天道様があるわね」

「あるよ」と正彦は平氣に答へた。

「僕のお天道様はお前だよ」

「其れだゝ其れがなさけ宿だ」と背後から怒鳴たものがある、其れは宅平であつた。

「あゝ御父さん」

「皆んななさけ宿の人になるんだ」と宅平は正を抱きあげた。祖先の惡血を稟けた嬰兒の頬は美しく朝日に輝いた。

「皆な、今までの悪い因縁を棄て了ふんだ、もう夜ぢやねえ朝だ、生れ替るんだ別な人になるんだ、そして働くんだ」と虎吉は叫んだ。而して未だ燻ぼり残る浦島家の焼跡を見やつた。焼跡にも朝日の光が充ちて居た。阿鼻叫喚を極めた地獄の光景は夢の如く消えて爽々しい朝の氣が天上にも地上にも流れ渡つた。

「あゝ太陽！」正彦はハムレットの臺詞の様な調子で叫んだ。一同は黙つて東の

空を拜んだ。

虎公後編をばり

昭和十四年一月十日印刷
昭和十四年一月十五日發行
昭和十四年一月廿五日再版

【虎公後篇】
定價 壹圓五拾錢

著者 佐藤紅綠

發行兼印刷人 大谷徳之助
東京市神田區神保町一ノ三〇

印刷所 大洋社印刷部
東京市神田區神保町一ノ三〇

發行所 大洋社出版部
東京市神田區神保町一ノ三〇
振替東京五九〇二番

— 製 復 許 不 —

★大洋社出版書籍目錄御希望の方はハガキお申込み次第送呈します

大 洋 社 版 最 新 刊 名 著

窪田空穂著 歌評釋と 短歌隨見 新四六函入上製 定價壹圓八拾錢	澁川玄耳著 支那獵奇秘話 新四六函入上製 定價參圓	澁川玄耳著 支那哀怨秘史 新四六函入上製 定價參圓	小林篤里著 英傑豐臣秀吉 新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢	小林篤里著 名將眞田幸村 新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢	小林篤里著 志士高山彥九郎 新四六函入上製 定價壹圓貳拾錢	大隈博誠著 必ず立身出世する 名前の附け方手引 四六版函入上製 定價壹圓五拾錢	松尾五郎著 必らず儲かる 株式相場の實戰術 四六版函入上製 定價壹圓五拾錢	前田默鳳編著 眞行草字鑑 菊半截函入特製 定價貳圓	庄野信治著 時下の職式辭挨拶手紙教本 菊版上製 定價壹圓五拾錢
---	------------------------------------	------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--	---	---	------------------------------------	--

大 洋 社 版 名 著

倉田白峯著 全國神社物語 新四六函入上製 定價貳圓五拾錢	畔上博著 もの知り百科辭典 四六版函入上製 定價貳圓四拾錢	梶天真著 心靈現象と死後の生活 四六版函入特製 定價壹圓七拾錢	梶天真編 資料 變態心理の解剖 四六版函入特製 定價貳圓	人相眞理會 處世要訣 人相の神秘 三六版特製 定價壹圓貳拾錢	骨相眞理會 處世要訣 骨相の神秘 三六版特製 定價壹圓貳拾錢	岡本榮龍著 九星と運命の神秘 三六版特製 定價壹圓貳拾錢	高島易斷會 人及ひ相場鑑定 易の神秘 四六版函入特製 定價壹圓五拾錢	福本福三著 生絲と人絹の基礎知識 新四六上製 定價壹圓五拾錢	濱野恭平著 綿絲と綿布の基礎知識 新四六上製 定價壹圓五拾錢
---------------------------------------	--	--	--	--	--	---------------------------------------	--	---	---

大 洋 社 版 不 滅 之 聖 書

宮島蓬州著	雲	水	は	語	る	新四六函入美本 定價壹圓五拾錢	
原田靈道譯著	新譯	大	般	涅槃	經	新四六函入美本 定價壹圓八拾錢	
里見達雄譯著	新譯	法	華	三	部	新四六函入美本 定價壹圓八拾錢	
岩野眞雄譯著	新譯	淨	土	三	部	新四六函入美本 定價壹圓八拾錢	
三井晶史譯著	新譯	大	品	般	若	新四六函入美本 定價壹圓八拾錢	
宮島蓬州著	禪	に	生	き	る	新四六函入美本 定價壹圓五拾錢	
宮島蓬州著	續	禪	に	生	き	る	新四六函入美本 定價壹圓八拾錢
後藤大用著	禪	の	新	講	話	新四六函入上製 定價壹圓五拾錢	
楠正康著	歎	異	鈔	新	講	話	新四六函入上製 定價壹圓五拾錢
中野松堂著	生	活	大	慈	悲	新四六函入上製 定價貳圓	

大 洋 社 版 絶 讚 修 養 名 著

生島隆一著	人	に	な	る	ま	で	感	激	新四六判函入上製 定價貳圓	
生島隆一著	青	年	よ	希	望	を	も	て	新四六判函入上製 定價貳圓	
生島隆一著	正	し	き	人	の	道	感	激	新四六判函入上製 定價貳圓	
生島隆一著	青	年	立	志	の	礎	新四六判函入上製 定價貳圓			
淺野彌太郎著	新	し	き	青	年	の	書	新四六判函入上製 定價貳圓		
淺野彌太郎著	希	望	に	輝	く	道	へ	新四六判函入上製 定價貳圓		
淺野彌太郎著	趣	味	の	哲	學	新四六判函入上製 定價貳圓				
青年修養會編	近	代	偉	人	の	青	年	時	代	新四六判函入上製 定價貳圓
日本修養會編	現	代	青	年	讀	本	四六版函入上製 定價壹圓五拾錢			
道重信教著	人	生	を	歩	み	行	く	道	新四六判函入上製 定價貳圓	

大 洋 社 版 最 新 著 名

賴山陽著 池邊義象譯	邦文日本外史 上卷 定價壹圓七拾錢	賴山陽著 池邊義象譯	邦文日本外史 中卷 定價壹圓七拾錢	賴山陽著 池邊義象譯	邦文日本外史 下卷 定價壹圓七拾錢	高橋北堂著 後立つに	國民知識寶典 新四六上製 定價壹圓五拾錢	山口愛一著	新譯源氏物語 四六版函入上製 定價貳圓五拾錢	松村英一編	總輯新譯萬葉集 上卷 新四六函入特製 定價壹圓八拾錢	松村英一編	總輯新譯萬葉集 下卷 新四六函入特製 定價壹圓八拾錢	白神白淵著	六依ル法 諸願屆書式大成 四六版函入美本 定價壹圓五拾錢	奈良益次郎著	鐵道旅行案内辭典 上卷 四六版函入特製 定價壹圓八拾錢	奈良益次郎著	鐵道旅行案内辭典 下卷 四六版函入特製 定價壹圓八拾錢
---------------	----------------------	---------------	----------------------	---------------	----------------------	---------------	----------------------------	-------	------------------------------	-------	----------------------------------	-------	----------------------------------	-------	---------------------------------------	--------	-----------------------------------	--------	-----------------------------------

大 洋 社 版 絶 讚 著 名

高木尙介著	範書翰文講話及文範 菊版函入三八六頁 定價貳圓五拾錢	高木尙介著	文章作る時これは便利だ 菊版函入二四〇頁 定價壹圓八拾錢	文學博士 植松安監著	新譯入實用いろは辭典 三六版全七五〇頁 定價壹圓五拾錢	帝國商業會編	ペン商業書翰文作り方 四六版函入上製 定價壹圓五拾錢	國際辯論會編	現代祝賀弔祭演說辭典 三六版金字特製 定價壹圓五拾錢	新語研究會編	現代新語辭典 三六版金字洋布 定價貳圓	東京研數學園編	詳解初等數學全書 四六版函入特製 定價壹圓五拾錢	樋口紋太著	最新補化學工藝品製造法 菊版函入四九〇頁 定價參圓	瓜生康一著	平易て解リよ鐵筋コンクリート計算法 四六版函入三〇〇頁 定價貳圓	岩崎高敏著	職務市町村會議員必携 四六版函入三六頁 定價壹圓七拾錢
-------	----------------------------------	-------	------------------------------------	---------------	-----------------------------------	--------	----------------------------------	--------	----------------------------------	--------	---------------------------	---------	--------------------------------	-------	---------------------------------	-------	--	-------	-----------------------------------

大 洋 社 版 絶 讚 文 學 書

宮島新三郎著 訂改 明治文學十二講 新四六全三三三頁 定價貳圓	宮島新三郎著 訂改 大正文學十四講 新四六全五二一頁 定價貳圓	宮島新三郎著 訂改 短篇小說新研究 新四六全二五七頁 定價壹圓貳拾錢	黑澤隆信著 芭蕉の歩んだ道 新四六判函入美本 定價壹圓五拾錢	黑澤隆信著 一茶俳句研究 新四六判函入美本 定價壹圓五拾錢	高濟虛子著 俳句入門 新四六判函入美本 定價壹圓五拾錢	內藤鳴雪著 俳句の作り方味ひ方 新四六判函入美本 定價壹圓五拾錢	正風俳句編 昭和精選 俳句大全 四六版函入上製 定價壹圓五拾錢	松村英一著 現代短歌辭典 新四六判函入美本 定價壹圓七拾錢	笛木謙治著 新譯古事記 菊金字函入特製 定價貳圓
---	---	--	---	--	--------------------------------------	---	---	--	-----------------------------------

387
2
662